

『三國志演義』三系統の版本の継承関係

―異同の全体像から見た成立過程の考察―

井口千雪

はじめに

『三國志演義』（以下『演義』と略称）の明代の版本は現存するだけでも三十種類以上が確認されており、それらの版本間には本文の異同が認められ、中川諭氏の大著『三國志演義』版本の研究』の分類法に従うと大きく三系統に分類される*1。一つは「二十卷繁本系諸本」（葉逢春本、余象斗本、鄭少垣本など）、一つは「二十卷簡本系諸本」（誠徳堂本、劉龍田本、衆賢山房本、黄正甫本など）、一つは「二十四卷系諸本」（嘉靖壬午序本〔以下嘉靖本と略〕、周日校本、李卓吾批評本、毛宗崗本など）である。

三系統の本文が存在するとなると、「原演義」（各種の版本に分岐する以前に存在したであろう一つの祖本。現存はせず）に最も近い文章を持つ版本はどれなのか、また原演義から各系統の版本が派生する過程でどうして本文が変化したのかという疑問が生じる。この問題はこれまで謎とされてきた『演義』の成立史に直結するものであり、大衆小説の誕生、その発展を考える上でも解明が俟たれる課題である。

先行研究では、嘉靖本以後の諸本はすべて嘉靖本を祖本とするのみ

ならず鄭振鐸氏の見解が長く版本研究の定説となっていたが*2、柳存仁氏が「三國志傳系のテキスト（著論中では二十卷簡本系に属する劉龍田本を使用）の祖本の成立は嘉靖本の成立より早く、古い『演義』の様相を残していた」と異論を呈し*3、また金文京氏は建安本（建陽〔現福建省南平市建陽区〕で刊行された二十卷繁本系と二十卷簡本系の総称）の方が史書に合致する場合があることを指摘した上で、少なくとも一部に嘉靖本以前のテキストの姿を残していると論じられた

*4。さらに小松謙氏は葉逢春本と嘉靖本の詳細な校勘を行った上で、葉逢春本の方がより古いテキストの本文を残していると指摘する*5。しかし、これら従来の研究はあくまで建安本が嘉靖本より古いテキストの姿を残していると論じたものであって、建安本を二十卷繁本系と二十卷簡本系に区別した上で三系統の継承関係を検討することはなされてこなかった。

筆者は拙論「『三國志演義』三系統の版本の継承関係―劉龍田本を手がかりに―」*6において、二十卷簡本系諸本に属する劉龍田喬山堂本（以下劉龍田本と略称）の特に後半の本文は、二十卷繁本系諸本に属する葉逢春本と二十四卷系諸本に属する嘉靖本の本文が入り混じ

ったようなものであることを指摘し、これは葉逢春本（或いはそれに準ずるテキスト）から劉龍田本へ（正確に言うとは簡略化される前に存在した繁本。筆者は「簡本系祖本」と称する）、劉龍田本から嘉靖本へと改変が施された結果であると論じた。（a）劉龍田本と嘉靖本は葉逢春本よりも文章が洗練されている、（b）嘉靖本は葉逢春本と劉龍田本よりも文章が洗練されている、（c）葉逢春本は劉龍田本と嘉靖本に比べ誤字訛字・脱落（或いは簡略化か）があるというという三つの条件を満たすには、まず三本に共通する一つの祖本「原演義」が存在し、誤字や脱落が生じたのが葉逢春本、原演義に第一段階の書き換えが施されて簡本系祖本が成立し、それを簡略化したのが劉龍田本、簡本系祖本にさらに書き換えを施したのが嘉靖本であるという継承関係しか成り立たないのである。

本論では前論を受けて、さらに可能な限り多くの例を挙げ、前論で提唱した継承関係をより確たるものとする。また全体を「一・序盤」「二・中盤」「三・終盤」に分けて三系統の異同状況の全体像を示すとともに、それぞれの部位で異同の状況が異なることを指摘し、最終的には各部位の成立過程、成立時期が異なる可能性にも言及するつもりである。

ちなみに比較に用いるのは前論と同様、二十卷繁本系諸本のうち最古の版本である葉逢春本、二十卷簡本系諸本の劉龍田本（この系統の現存する最古の版本ではないが、部位によっては簡略化が比較的小さいこと、先行研究でしばしば簡本の代表として使用されていることから劉龍田本を用いる）、二十四卷系諸本のうち最古の版本とされる

嘉靖本とした（但し嘉靖本の本文が二十四卷系諸本のうち最も古いかどうかは疑問もある。筆者は閑索説話を持つ周曰校本の方が嘉靖本より古い本文を持つのではないかと指摘している*7）。

一・序盤

従来の版本研究では、劉龍田本が属する二十卷簡本系諸本は嘉靖本が属する二十四卷系諸本よりも葉逢春本が属する二十卷繁本系諸本に近い本文を持つとされて来た。これは確かに『演義』序盤においては間違いない。例えば第一則「祭天地桃園結義」では葉逢春本と嘉靖本に異同があつて且つ劉龍田本が葉逢春本に一致する文字は三百七十六字あるが、嘉靖本と一致するのはたった十字だけである（嘉靖本のみにある楊賜と蔡邕の奏上は長文のため計上せず）*8。まずは以下に同則の主な異同を全て列挙し、継承関係を考察する。異同のタイプは、①一方にある字句が一方に無い場合、②どちらにも字句はあるが叙述が異なる場合の二種類に分類することができ、①のような場合は一方が増補したのか或いはもう一方が省略したのか判断が難しいため、以下具体例を挙げる際には主に②のような異同を扱うことにする。但し①のような異同でもその字句の有無で大幅に読みやすくなるとか、史書にもその字句があるかどうかといった点から継承関係を導き出し得ることもあるので、場合によっては言及することにする。

凡例

【第□則】 即題（葉逢春本を底本とする）（葉逢春本卷□）
○□（a/b）□行（葉逢春本を底本とする） 継承関係を簡略に示

して説明。

※●は歴史書と関連がある異同。

各本の本文。(葉)・葉逢春本、(劉)・劉龍田本、(嘉)・嘉靖本。文字は可能な限り原文に近い字体で表記する。

その異同が史書と関連がある場合は『演義』の文章に最も近いものを挙げる。(三)(注)・『三國志』及び裴松之注、(資)・『資治通鑑』、(綱)・『資治通鑑綱目』、(蜀)・『蜀漢本末』。その他にも『蕭氏續後漢書』、『郝氏續後漢書』、『陸狀元増節音註精義資治通鑑』、『資治通鑑』の冊節本を参照したが、『演義』に利用されている可能性は低いと判断した。また『全相平話三國志』と関連のある場合は(平)として挙げた。詳しい考察。

【第一則 祭天地桃園結義】(葉逢春本卷一)

○2a2行 (葉)〔劉〕↓(嘉)か、(嘉)↓(葉)〔劉〕か判断つかず。

(葉) 至秋九月、宦官曹節・王甫弄權、竇武・陳蕃謀誅、機謀不密、

反被曹節・王甫所害。

(劉) 至秋九月、宦官曹節・王甫弄權、竇武・陳蕃謀誅、機謀不密、

反被曹節・王甫所害。

(嘉) 至秋九月、中涓曹節・王甫弄權、竇武・陳蕃預謀誅之、機謀不密、

反被曹節・王甫所害。

傍線部、葉逢春本と劉龍田本は「宦官」、嘉靖本のみ「中涓」(これも宦官を指すことば)としている。どちらが原演義に近いかここのみでは判断しかねる。

●2a13行 (葉)〔劉〕↓(嘉)へ改変及び史書から増補か(『資治通鑑』)。

(葉) 種種不祥、非止一端。此時宮中十常侍用事。那十人張讓・趙忠・段圭・曹節・侯覽・封譚・蹇碩・程廣・夏輝・郭勝。這十箇把握朝綱。是他門下得官做、不是他門下干有功勞、且守欽期。靈帝自嘗說張常侍是我父、趙常侍是我母。因此宦官全無忌憚、府第體宮院蓋造。

(劉) 種レ不祥、非止一端。此時宮中十常侍用事。那十人張讓・趙忠・段圭・曹節・侯密・封譚・蹇碩・程廣・夏輝・郭勝。這十個把握朝綱。是他門下得官做、不是他門下幹有功勞、且守欽期。靈帝自常說張常侍是我父、趙常侍是我母。因此宦官全無忌憚、府第體宮院蓋造。

(嘉) 種種不祥、非止一端。於是靈帝憂懼、遂下詔、召光祿大夫楊賜等詣金商門、問以災異之由、及消復之術。賜對曰、「臣聞、春秋讖曰、天投蜺、天下怨、海內亂……衆變可弭。」議郎蔡邕亦對其略曰、「臣伏思諸異……受怨姦仇。謹奏。」……後張讓・趙忠・封譚・段珪・曹節・侯覽・蹇碩・程曠・夏輝・郭勝、這十人執掌朝綱。自此天下桃李、皆出於十常侍門下。朝廷待十人如師父。由是出入宮闈、稍無忌憚、府第依宮院蓋造。

①嘉靖本の網掛部、楊賜と蔡邕の奏上は史書からの増補か(『資治通鑑』の文章と一致)。

②葉逢春本と劉龍田本の傍線部「是時宮中十常侍用事」(この時宮中では十常侍が権力を手中に収めていた)、「這十箇把握朝綱。是他門下

得官做、不是他門下干有功勞、且守欵期」(この十人が朝綱を握っていた。彼らの門下の者は官を得ることができたが、彼らの門下でない者は功績があってもしばし「他の官吏の」任期が満了するのを待たなければならなかった)が、嘉靖本では「自此天下桃李、皆出於十常待門下」(ここより天下の門人はみな十常待の門下から出るようになった)と簡にして要を得た文章となっている。特に葉逢春本と劉龍田本の「欵期」(任期が満了する)という語は元代の法律文書『元典章』に用例が見られる程度で、一般的に使用されていた語彙ではなかったようであるから、嘉靖本がこの語を削ってわかりやすく書き換えたのみでよいだろう。参考までに『元典章』に見える「欵期」(任期が満了する)の用例を以下に記載する。

○【官吏革前称冤】……官吏取受、格前稱冤、行移照勘追問之際、既遇釋免、再无取到招伏、欵依革撥、合令還職。如及欵期、已注代官、別行求任、相應。(官吏革前、冤なりと稱すこと)……官吏が賄路を受け取り、罪をただすも冤罪であると主張し、調査・喚問を行っている時に赦免に遇ったならば、これ以上は罪を認めるよう求めることなく、皇上の依准により廢罪し、もとの職に戻すべきである。もしも任期が満了しており、すでに代わりの官吏が入っていたならば、別に職を探して就かせるべきである。

このことは『演義』の執筆者が政治・法律用語に対してある程度知識のある人間であり、しかも元代の人であった可能性が高いことを示唆している。

●3 a 9 行 (葉) (劉) ↓ (嘉) へ史書から増補か(『後漢書』「資治通鑑」『綱目』など)、(嘉) ↓ (葉) (劉) へ簡略化か、判断つかず。

(葉) 張角聞知事發、星夜起召百姓云、「今漢運教終。…

(劉) 張角聞知事發、星夜起召百姓云、「今漢運教終。…

(嘉) 張角聞知事發、星夜起兵。張角自稱「天公將軍」、弟寶稱「地

公將軍」、弟梁稱「人公將軍」。召百姓云、「今漢運教將終。…

(綱) 角等知事已露、馳救諸方、一時俱起、皆著黃巾爲幟。角自稱天

公將軍、弟寶稱地公將軍、梁稱人公將軍。

葉逢春本と劉龍田本の「起召百姓」(百姓を起こし召した)は舌足らずなようでもあるが、文意が通らないほどではない。嘉靖本には「起

の後に「兵」があつて読みやすく、「召百姓」との間に波線部の如く史書と同じ文章がある。嘉靖本で洗練・増補された可能性が高いように思われるが、葉逢春本と劉龍田本で脱落した可能性も否定はできない。

●3 b 7 行 (葉) (劉) ↓ (嘉) へ史書に拠り改変(『三國志』)。

(葉) 生得身長七尺五寸、兩耳垂肩、雙手過膝、龍目鳳準。

(劉) 生得身長七尺五寸、兩耳垂肩、雙手過膝、龍目鳳準。

(嘉) 生得身長七尺五寸、兩耳垂肩、雙手過膝、目能自顧其耳。

(三) 身長七尺五寸、垂手下膝、顧自見其耳。

(平) 生得龍準鳳目、禹背湯肩、身長七尺五寸、垂手過膝。

劉備の相貌についての記述である。傍線部、葉逢春本と劉龍田本は「龍目鳳準」(龍のような目、鳳のような鼻筋)、嘉靖本は「目能自顧其耳」(目は自らその耳を顧みることができた)とする。元代に出版された『三國志平話』では劉備を「龍準鳳目」と形容しており、葉逢春本と劉龍

田本はこれを継承したものである。「鳳準」は劉備以外に使われている用例が無く、一般的な語彙ではなかったようであるから、嘉靖本では史書（『三國志』）を参照して書き換えられたものと考えられる。

● 4 a 3 行（葉）（劉）が史書に近い↓（嘉）へ改変。

（葉）劉德然父劉元起見玄德家貧、常資給之。

（劉）劉德然父劉元起見玄德家貧、常資給之。

（嘉）玄德叔父劉元起見玄德家貧、常資給之。

（三）德然父元起常資給先主。

劉備が劉德然（学友）の父、劉元起から経済援助を受けていたという記述であるが、葉逢春本と劉龍田本は『三國志』の文面と同じく「德然の父」とし、嘉靖本は「玄徳の叔父」とする。史書を参照せず恣意的に改変を施した結果であろう。

○ 4 a 9 行（葉）↓（劉）↓（嘉）へ改変か。

（葉）玄徳見此人形貌異常、遂與同人村務、問其人姓名。

（劉）玄徳見此人形貌異常、遂與同人村中、問其姓名。

（嘉）玄徳見此人形貌異常、遂與同人村中、問其姓名。

葉逢春本の傍線部「村務」は村の酒店を指す語で、元曲に用例の多い語彙である。例えば『趙盼兒風月救風塵』第二折『醋葫蘆』に「他道是殘生早晚喪荒丘、做了个游街野巷村務酒」（彼は言う、この人生は遅かれ早かれ終わって墓場行き、花街に遊んで田舎の村務の酒を飲んでいよう）、『逞風流玳瑁百花亭』第二折『紅繡鞋』に「野花村務酒知味便合休」（田舎娘と村務の酒は味を知ったらもうおしまい）というように、甚だ俗語的に使われている（それ以外の文献、例えば『欽

定大清一統志」に見える「楊村務」などは「楊村の税関」の意で「村の酒店」の意ではない）。つまり葉逢春本では元代の俗語が利用されているのであり、後世にはあまり使われなくなっていたことから、劉龍田本と嘉靖本のように「村中」と改変されたものとみられる。逆は考えにくからう。

○ 4 b 9 行（葉）（劉）↓（嘉）へ語感が自然になるよう改変か。

（葉）飛曰、「我庄後有一小園、桃花盛開……」：次日於桃園中列下

金錢紙燭、宰 烏牛白馬、祭獻天地。

（劉）飛曰、「我庄後有一小桃園、桃花盛開……」：次日 桃園 列陳

金錢紙燭、宰 烏牛白馬、祭獻天地。

（嘉）飛曰、「我庄後有一 桃園、開花茂盛……」：次日於桃園中列下

金錢紙燭、宰殺烏牛白馬、列於地上。

嘉靖本は当時の感覚で語感が自然になるように改変したものか（特に傍線部は「桃」が重複しないように）。

このように、葉逢春本と劉龍田本の文章の方が洗練されていない状態であり、嘉靖本には洗練を目的とした改変が施されている。そして嘉靖本へ至る過程での改訂者の意図は、①元代特有の語彙や特殊な用語をわかりやすい語に改変、②場合によっては史書を参照して校訂、③史書からの増補（主に奏上文）、④語感の調整など恣意的な改変、などにあつたことがわかる。

以降、『演義』序盤については概ね同様の状態が続く。

二. 中盤

『演義』中盤に入るとこの状況が少し変わってくる。赤壁の戦いのあたりから劉龍田本が嘉靖本に一致する字句が徐々に増えて来て、赤壁の戦いの後、第一〇一則「周瑜南郡戰曹仁」(周瑜が南軍の曹仁を攻める)からはかなり高い割合で嘉靖本に一致するようになるのである。具体的な数字で示すと、

○第九七則「七星壇諸葛祭風」

(葉) (劉) / (嘉) : 一六五字、(葉) / (劉) (嘉) : 三三二字。

○第九八則「周公瑾赤壁鏖兵」

(葉) (劉) / (嘉) : 一九八字、(葉) / (劉) (嘉) : 二八八字。

○第九九則「曹操敗走華容道」

(葉) (劉) / (嘉) : 八九字、(葉) / (劉) (嘉) : 四一字。

○第一〇〇則「関雲長義釋曹操」

(葉) (劉) / (嘉) : 一〇七字、(葉) / (劉) (嘉) : 二九字。

○第一〇一則「周瑜南郡戰曹仁」

(葉) (劉) / (嘉) : 一七七字、(葉) / (劉) (嘉) : 七五字。

○第一〇二則「諸葛亮一氣周瑜」

(葉) (劉) / (嘉) : 一九一字、(葉) / (劉) (嘉) : 九八八字。

※(葉) (劉) / (嘉) は葉逢春本と嘉靖本が異なり、且つ劉龍田本が葉逢春本に一致している文字。(葉) / (劉) (嘉) は嘉靖本に一致している文字。

というように、第一〇一則「周瑜南郡戰曹仁」から劉龍田本が嘉靖本に一致する文字が急増する。

以下に第一〇一則「周瑜南郡戰曹仁」の主な異同の具体例を全て挙げ、異同の詳細と三本の継承関係を詳しく考察する。

【第一〇一則 周瑜南郡戰曹仁】(葉逢春本卷五)

○16 b 1行 (葉) ↓ (劉) ↓ (嘉) へ洗練。

(葉) 衆皆再三哀告、才方放免。

(劉) 衆皆再三哀告、孔明方纔放免。

(嘉) 衆皆 哀告、孔明方纔饒了。

傍線部、葉逢春本には主語「孔明」が無く舌足らずだが、劉龍田本と嘉靖本にはある。波線部は葉逢春本と劉龍田本が一致しており、嘉靖本のみ「饒了」となっている。劉龍田本は葉逢春本と嘉靖本の間段階で、しかも葉逢春本が最も原演義の拙い文章に近く、嘉靖本へと洗練されていく様子がわかる。また嘉靖本には動詞の後に完了の意を表す「了」が付いている例が多々見つかり、これも文法的洗練が施された結果とみられる。

○16 b 14行 (葉) ↓ (劉) ↓ (嘉) へ洗練。

(葉) 瑜曰、「……若應 得不本分、~~~~~ 比及 取南郡、

先結果 劉備。」

(劉) 瑜曰、「……若應 得 本分、 比及 取南郡、如意不

合、先結 劉備。」

(嘉) 瑜曰、「……若應允得 便罷、如不應允、未及他取南郡、

先結果了劉備。」

周瑜は劉備が南郡を攻め取るつもりと知り、直談判しに行つて止めようとする。葉逢春本の文章は「もし(劉備が)おとなしくするつも

りはないと答えるなら、南郡を取る前にまず劉備を殺してやる」と解釈されるが、傍線部「若應得不本分」の「應得」を「承諾する」と解釈してしまうと、「もし（南郡を取らないと）承諾するなら（私も）おとなしくはしない」という意味の通らない文章になるので、読者に混乱を引き起こしかねない。そこで劉龍田本は「不」を省略して「若應得不本分」（もし承諾するなら「私も」おとなしくする）と書き換え、さらに嘉靖本は「若應允得便罷」（もし承諾するならそれでいいが）とより理解しやすく書き換えたのであろう。逆に葉逢春本のように混乱を引き起こすような文章に書き換えるということは考えにくい。

○17 a 16行（葉）↓（劉）へ洗練か。

（葉）周瑜曰、「大丈夫一言既出、駟馬難追。待吾取不得時、任公自取。」

（劉）瑜曰、「大丈夫一言既出、駟馬難追。何悔之。」

（嘉）瑜曰、「大丈夫一言既出、駟馬難追。何悔之有。」

葉逢春本の傍線部「待吾取不得時、任公自取」（私が南郡を取れなかったらあなたが自ら取るに任せよう）は、この直前で劉備が「但恐都督不能取耳」（ただ都督が「南郡を」取ることができないのを恐れるだけです）と言うのに対し、周瑜が答える「待我取不得南郡時、任從玄德公自取」という台詞と重複している。故に劉龍田本と嘉靖本のように省略されたのだろう。

○17 b 7行（葉）↓（劉）へ洗練か。

（葉）孔明大笑曰、「當初亮勸主公取荊州、主公不聽……」

（劉）孔明笑曰、「當時勸主公取荊州、不聽……」

（嘉）孔明大笑曰、「當初亮勸主公取荊州、主公不聽……」

この前後、葉逢春本では劉備に対する呼称が「主公」だったり「公主」だったりするが、劉龍田本と嘉靖本では「主公」で統一されている。

○17 b 9行（葉）↓（劉）へ洗練。

（葉）孔明曰、「不須主公憂慮、任教周瑜去廝殺、早晚只顧教公主任南郡城中高坐。」

（劉）不須主公憂慮、佯着周瑜去廝殺、早晚教主在南郡城中高坐。」

（嘉）孔明曰、「不須主公憂慮、儘着周瑜去廝殺、早晚教主公在南郡城中高坐。」

傍線部、葉逢春本の「任教」はここでは「任」（に任せる）＋「教」（使役）で「させるに任せる」という意になるが、「任教」には別に「教育に当たる」という意味がある。誤読を引き起こさないように劉龍田本と嘉靖本では「儘着」に書き換えられたのであろう。波線部、葉逢春本の「只顧」が劉龍田本と嘉靖本では省略され、簡潔になっている。また二重傍線部、前項と同様に劉龍田本と嘉靖本では劉備に対して「公主」という語を使用しないよう専心している。全体的に劉龍田本と嘉靖本の文章の方が洗練されているといえる。

●18 a 16行（葉）が史書に近い↓（嘉）へ洗練。劉龍田本は簡本のため比較できず。

（葉）陳矯將為曹仁只就那裏筭住、遙與牛金為聲勢。

（劉）なし

（嘉）陳矯欲教曹仁只就那裏住、遙與牛金為勢。

（三）矯等以為仁當住溝上、為金形勢也。

「陳矯は曹仁がただそこに留まり、遠くから牛金のために威勢をなすのだと予想した」という文章である。葉逢春本の傍線部「將為」() と思う) は宋元期に用例の多い語で(「將謂」とも通じる)、『三國志』(巻九魏書九曹仁傳)の「以為」を『演義』成立当時の言葉に置き換えたものだろう。おそらく明代にはあまり使用されてなくなっており、「將に為さんとす」()しようとする)と誤って読んでしまいたいそうにもなるので、嘉靖本のように「欲教」()させようとする)と読みやすく書き換えられたのだろう。また葉逢春本の波線部「為聲勢」(威勢をなす)は『三國志』の「為金形勢」の「形」が「聲」に訛った結果と考えられるが、嘉靖本では単に「為勢」となっている。

○18 b 5 行 (葉) ↓ (劉) ↓ (嘉) へ洗練か。

(葉) (曹仁) 正遇蔣欽攔路、被人奮武衝散呉兵、牛金助威、呉兵大亂。

(劉) (曹仁) 正遇蔣欽攔路、被仁 殺散、呉兵大亂。

(嘉) (曹仁) 正遇蔣欽攔路、仁奮力衝散、牛金助威。

傍線部、葉逢春本の文章は「曹仁は勇ましく戦つて呉兵を蹴散らした」と解釈されるが(但し「仁」を「人」と誤っている)、被害のニユアンスを表す「被」の字を受身に誤読しそうになる。劉龍田本は「被」を受身形として書き換えることで読みやすくしており、嘉靖本ではもはや「被」は省略されて単なる能動文となっている。逆に葉逢春本のように読みにくく書き換えるということは考えにくからう。葉逢春本は読み物としての文章力が稚拙で、劉龍田本、そして嘉靖本へと文章が洗練されていったことがうかがえる。

○18 b 9 行 (葉) ↓ (劉) (嘉) へ洗練。

(葉) 甘寧出曰、「……將軍然後可取南郡也。」

(劉) 甘寧 曰、「……都督 可取南郡。」

(嘉) 甘寧出曰、「……都督然後可取南郡也。」

葉逢春本はここでは周瑜に対する呼称を「將軍」とするが、劉龍田本と嘉靖本は前後を含めて「都督」で統一する。

○19 a 2 行 (葉) ↓ (劉) (嘉) へ洗練か。

(葉) 探子飛報將周瑜寨中來、說……

(劉) 探軍飛報 周瑜。

(嘉) 探馬飛報 周瑜 備 說……

葉逢春本にだけ「將」の字があるが、「動詞+將+方向補語」の「將」は特に意味が無く、読み物の文章としては必要無いうえ、明代以降用例が減少する語であることから、劉龍田本と嘉靖本で省略されたものとみられる。

○19 a 9 行 (葉) ↓ (劉) ↓ (嘉) へ洗練か。

(葉) 瑜 喜、留兵萬人付 凌統、即時盡起、投奔夷陵來。

(劉) 瑜 喜、留兵萬人付 凌統、即日 起兵、奔夷陵來。

(嘉) 瑜大喜、留兵萬餘付與凌統、即日 起兵、投 夷陵來。

劉龍田本の傍線部の文字は葉逢春本と一致し、波線部の文字は嘉靖本と一致する。劉龍田本は葉逢春本と嘉靖本の中間段階のテキストであることがわかる。また葉逢春本の波線部「盡起」は目的語が無くやや舌足らずであり、劉龍田本と嘉靖本では「起兵」と読みやすくなっていることから、葉逢春本が最も古い形であるといえる。この二点を総合して考えると、葉逢春本から劉龍田本へ第一段階の洗練、さらに

嘉靖本へ第二段階の洗練が施されたとわかる。

○19 a 16行 (葉) ↓ (劉) (嘉) へ洗練か。

(葉) 寧_下令_令軍士嚴粧飽食。

(劉) 寧傳令教軍士嚴粧飽食。

(嘉) 寧傳令教軍士嚴粧飽食。

傍線部はどちらが古い形か判断がつかないが、波線部は葉逢春本だと「令」が二字続いて読みにくいため、劉龍田本と嘉靖本で「教」に書き換えられたものと考えられる。

○19 b 9行 (葉) ↓ (劉) ↓ (嘉) へ洗練か。

(葉) 何不拆開丞相留下計策。

(劉) 何不拆開丞相所遺計策。

(嘉) 何不拆開丞相 遺計 觀之。

葉逢春本の文章でも意味はわかるが、「丞相留下計策」は名詞ではないので「拆開」の目的語としてはふさわしくない。劉龍田本では「丞相所遺計策」(丞相が遺した計策)と名詞化することによって「拆開」の目的語として適当であり、文法的に洗練されているといえる。さらに嘉靖本では「丞相遺計」と簡にして要を得た文章となっている。

前論「『三國志演義』三系統の版本の継承関係―劉龍田本を手がかりに―」*₉では特に孔明の南征の部分の例を挙げ、『演義』後半については原演義から簡本系祖本への過程で第一段階の書き換えが施されていたと指摘したが、『演義』中盤においても同様の状況が生じていたのである。その改訂者の目的は、原演義の文章の解釈しにくい部分

や誤読しかねない部分を読みやすくする、或いは無駄な文字の省略といった、読み物としての文章の洗練にあったことがうかがわれる。

ちなみに嘉靖本のみが異なる例をほとんど挙げなかったのは決して意図的というわけではなく、例えば「兵」が「軍」になっている(その逆もあり)、「在」が「於」になっている(その逆もあり)、「程普・魯肅」など名前の序列が「魯肅・程普」と逆になっている、「交」が「教」になっている、「而」「之」の有無といった定型的な異同が主であったため、ここでは取り立てて言及することはしなかった。しかしここで挙げた例からも嘉靖本が劉龍田本よりさらに洗練された本文となっていることに疑いはない。

三. 終盤

中盤においてはまだ劉龍田本は嘉靖本より葉逢春本に近いが、終盤、劉備の死のあたりから異同の状況がさらに大きく変わる。劉備は関羽の仇を討つため大軍を興し呉へ侵攻するが、呉の大都督、陸遜に敗れ白帝城へ敗走する(夷陵の戦い)。この第一六七則「劉先主夜走白帝城」第一六八則「八陣圖石伏陸遜」までは中盤と同様、劉龍田本は葉逢春本に近いながら嘉靖本と一致する字句もあるという異同の状況が続いている。これが第一六九則「白帝城先主託孤」(劉備の死)から一変して、嘉靖本に一致する字句が一気に増加するのである。ここでも具体的な数字で示すと、

○第一六七則「劉先主夜走白帝城」

(葉) (劉) / (嘉) : 五七三字、(葉) / (劉) (嘉) : 九六字。

○第一六八則「八陣圖石伏陸遜」

(葉) (劉) / (嘉) …二四三字、(葉) / (劉) (嘉) …五九字。

○第一六九則「白帝城先主託孤」

(葉) (劉) / (嘉) …二九六字、(葉) / (劉) (嘉) …二一九字。

○第一七〇則「曹丕五路下西川」

(葉) (劉) / (嘉) …二九一字、(葉) / (劉) (嘉) …二五〇字。

※(葉) (劉) / (嘉) は葉逢春本と嘉靖本が異なり、且つ劉龍田本が葉逢春本に一致している文字。(葉) / (劉) (嘉) は嘉靖本に一致している文字。

一致している文字。

というように、第一六九則「白帝城先主託孤」以降、劉龍田本が葉逢春本に一致する文字と嘉靖本に一致する文字の割合はほぼ同等となる。

但し終盤の異同の状況はかなり複雑であり、葉逢春本と劉龍田本の異同が非常に少ない部分も存在する(現在校勘した限りでは第二〇五則「孔明火燒木柵寨」と第二〇六則「孔明秋夜祭北斗」(孔明の死)や、第二三五則「蜀後主輿襯出降」の序盤(蜀の降魏の冒頭)がそれに当たる)。この怪奇な状況については後述することにした。

以下に第二三五則「蜀後主輿襯出降」(第二四〇則「王濬計取石頭城」から顕著な異同を全て列挙し、継承関係を考察する(葉逢春本が缺のため余象斗雙峰堂本(以下余象斗本と略称)で代用した)。この部分の本文はただ史書の文章を繋げただけのような文章であることから、どの版本が最も史書の文章に近いか、或いは洗練されて史書から遠ざかっているかを基準として、継承関係をより確実に導き出すことができる。文学的な味わいには乏しい部分ではあるが、版本の継承関係

を導き出すにはうってつけといえる。以下の考察を以て、劉龍田本が葉逢春本(正確には原演義)から嘉靖本へ至る中間段階の版本の様相を残しているという提唱はいつそう説得力を増すだろう(特に●で示したのが史書との影響関係がある異同)。

【第二三五則 蜀後主輿襯出降】(余象斗本卷二十)

●15 a 5行 (余) (劉) が史書に近い↓(嘉)へ洗練。

(余) 呉主差大將 丁奉向壽春。丁封・孫異向沔中二路兵發。

(劉) 呉主差大將軍丁奉向壽春。丁封・孫異向沔中二路兵來救援。

(嘉) 休命大將軍丁奉督兵回壽春、又命孫異引兵會合丁奉俱向沔中救援。

應。兵已發。

(綱) 呉使大將軍丁奉向壽春、丁封・孫異向沔中以救漢。

余象斗本と劉龍田本は史書とほぼ一致している。嘉靖本には丁封の名が無く(丁奉と音が同一のため混乱を避け削除か)、全体的に史書から離れた文章となっている。

○15 a 6行 (余↓嘉)へ洗練か。(劉)はどちらの簡本か判断つかず。

(余) 却說鄧艾既得綿竹、使人哨到成都界口。後主聽知諸葛瞻父子已亡。

(劉) 後主知諸葛瞻父子已亡。

(嘉) 却說後主在成都聽知鄧艾取了綿竹、諸葛瞻父子已亡。

嘉靖本は簡にして要を得た文章になっている。

○15 a 7行 (余) (劉) ↓(嘉)へ増補か、(嘉) ↓(余) (劉)へ簡略化か判断つかず。

(余) 近臣奏曰、「成都郷外百姓扶老繫幼、哭声振天、逃生而去。兵微将寡、難以迎敵。」

(劉) 近臣奏曰、「成都 百姓扶老繫幼、哭声振天、逃生而去。軍微将弱、難以迎敵。」

(嘉) 近臣奏曰、「城外百姓扶老携幼、哭声大震、各逃生性。」後主大驚。忽哨馬報到說、魏兵將近城下。多官議曰、「軍微将寡、難以迎敵。」

嘉靖本の傍線部が余象斗本と劉龍田本には無い。

●15 a 8 行 (余) (劉) ↓ (嘉) へ史書を参照して改訂か。

(余) 不如棄成都、奔走南中、問蛮主借兵來。

(劉) 不如棄城、 投蛮主借兵來。

(嘉) 不如 成都、奔 南中七郡險峻、可以自守、就借蠻兵。

(三) 或以爲南中七郡、阻險斗絶、易以自守、宜可奔南。

傍線部、嘉靖本が史書に近い。次々項で指摘するように嘉靖本にはこの前後で史書を参照して改変を施した形跡が見られることから、こ

こでも史書を参照して改訂を施した可能性が高い。

○15 a 9 行 (余) (劉) ↓ (嘉) へ洗練か。

(余) 近臣又奏曰、「事急矣。若不投南、可投東呉為上。」

(劉) 近臣又奏曰、「事危矣。若不投南蛮、可投東呉為上。」

(嘉) 文武又奏曰、「蜀呉既已同盟、今事急矣、可以投之。」

嘉靖本の方が論理的で洗練された文章に思われる。

●15 a 11 行 (余) (劉) ↓ (嘉) へ史書から譙周の台詞と疏を増補。

(余) 譙周又諫曰、「自古以來……是兩番之辱也。臣意不若降魏為上。」

(劉) 譙周 曰、「臣聞自古以來……是兩次之辱也。愚意不若降魏為上。」

(嘉) 周又諫曰、「自古以來……是兩番之辱矣。今呉未賓、勢

不得不受、禮不得不屈。若陛下降魏、魏不裂土封之。臣請詣京師、以爭之。」乃上疏曰、「光祿大夫譙周、切惟陛下以北兵深入、有欲適南之計、臣愚以為不安。……若奔南方、必因人勢衰……其禍必深。易云……豈所樂哉、不得已也。」

(三) 惟周以為、「自古以來……再辱之恥何與一辱。……周曰、「方今

東呉未賓、事勢不得不受、之後、不得不禮。若陛下降魏、魏不

裂土以封陛下者、周請身詣京都、以古義爭之。」衆人無以易周

之理。後主猶疑於入南、周上疏曰、「或說陛下以北兵深入、有

欲適南之計、臣愚以為不安。……若奔南方、必因人勢衰……其

禍必深。易云……豈所樂哉、不得已也。」

三本共に傍線部の譙周の台詞は史書に拠ったものだが、波線部は余象斗本と劉龍田本では独自の文、嘉靖本は史書に見えるもう一つの譙周の台詞が取り入れられている。さらに点線部の譙周の疏も史書から取り入れている。しかし、『三國志』の点線部に含まれる「若奔南方」其禍必深」を縮めたと思われる「若投之、必遭其禍」という文面がこの直前の譙周の台詞の中に既に出ており、嘉靖本はここで点線部を二重に利用していることになる。嘉靖本は既出の「若投之、必遭其禍」が点線部を要約したものと気付かず、再び史書を参照して点線部を取り入れてしまったものと考えられる。

●15 b 6 行 (余) 『三國志』に拠る↓(劉) へ史書を参照して増補↓

(嘉)へ史書を参照して改訂か。

(余) 便死社稷、以報先君、可也。

(劉) 以報先君、可也。豈肯降乎。

(嘉) 同死社稷、以見先帝、可也。奈何降乎。

(三注) 同死社稷、以見先帝、可也。

(資) (綱) (蜀) 同死社稷、以見先帝、可也。奈何降乎。

別論に述べることだが、蜀に関するエピソードはほぼ『三國志』及び裴松之注が利用されているという結果が出ていたので^{*10}、『三國志』裴松之注と同じく傍線部の句が無い余象斗本が最も原演義に近いと考えられる。そこに『資治通鑑』『綱目』『蜀漢本末』などを参照して「奈何降乎」(劉龍田本では「豈肯降乎」と訛字)が増補された結果が劉龍田本と嘉靖本であろう。さらに嘉靖本は再び史書を参照し、網掛部の文字も完全に史書に一致するよう改訂したと考えられる。わざわざ史書を参照して校訂するほどの異同かと疑うかもしれないが、これは劉備の孫である劉禪が社稷のために命を捨てても魏と戦おうとするという『演義』の根幹的精神を表すようなエピソードであること、『全相平話三國志』にも見える有名かつ重要な話だったことを鑑みれば、史書通りの文面にしなければという意志が働いても不思議ではない。

○15b7行(余)↓(劉)↓(嘉)へ洗練か。

(余) 吾祖翁 不容易得天下。

(劉) 吾祖翁 非容易得社稷。

(嘉) 吾祖公公非容易創立基業。

劉龍田本の傍線部は「翁」が余象斗本に一致、「非」が嘉靖本に一致し、

余象斗本と嘉靖本の中間段階を示している。また波線部は余象斗本から嘉靖本へ洗練された口調になっている。

●15b11行(余)(劉)が史書に近い↓(嘉)へ洗練か。

(余) 遣侍中張昭・駙馬都尉鄧良、賈降欵并璽綬、詣鄧艾軍前投降

……艾使人遠接、ヒ着張昭・鄧良、直至繼城、二人拜於階下

……(鄧艾)重待張昭・鄧良二人、即時答書、送二人回成都

……張昭・鄧良回見後主。

(劉) 令侍中張昭・駙馬都尉鄧良、賈降書 投降

……艾令人遠接、紹・良、二人拜于階下

……(鄧艾)重待張昭。鄧艾、即時答書、二人回成都

……見後主。

(嘉) 遣私署侍中張紹・駙馬都尉鄧良、同周齋王璽來雒城請降……艾

大喜、不時張紹等至、艾令人迎入、三人拜伏於階下……(鄧艾)

重待張紹等、艾作書、與三人齋回成都……三人拜辭鄧艾、逕還

成都、入見後主。

(三) 紹・良與艾相遇於雒縣。艾得書、大喜、即報書、遣紹・良先還。」

①網掛部、鄧艾の元へ詣でるのは、余象斗本と劉龍田本では史書と同じく張紹と鄧良の二人、嘉靖本では譙周を加えた三人となっている。

嘉靖本は譙周について台詞を改訂したり疏を増補していることは先述した通りで、ここでも譙周の登場箇所を増やして『演義』における譙

周の地位を上げようとする意図があったのではないかと疑われる。

②傍線部と波線部、余象斗本と劉龍田本の文章は稚拙で読みにくく、

嘉靖本は簡にして要を得た洗練された文章となっている。

● 16 b 2 行 (劉) (嘉) ↓ (余)へ簡略化か。

(余) 後主見書大喜、遣尚書李虎送所轄地圖・文籍……男女九十四萬、帶甲將士十萬二千……金銀錦綺綵絹珠玉、皆在庫藏、不及見數。

(劉) 後主見書大喜、即令大僕蔣顯齋勅、令姜維早降、又令尚書郎李

虎送 文簿與艾……男女九十四萬、帶甲將士十萬二千

……金銀二十斤、綺綵絹二十萬匹、餘物在庫、不計其數。

(嘉) 後主看畢大喜、即遣大僕蔣顯齋勅、令姜維早降、遣尚書郎李

虎送 文簿與艾……男女九十四萬、帶甲將士十萬二千

……金銀二十斤、錦綺綵絹各二十萬疋、餘物在庫、不及具數。

(三注) 禪又遣太常張峻・益州別駕汝超受節度、遣太僕蔣顯有命敕姜

維。又遣尚書郎李虎送士民簿……男女口九十四萬、帶甲將士十

萬二千……金銀各二十斤、錦綺綵絹各二十萬匹、餘物稱此。

①傍線部、余象斗本は「李虎をして地図と文籍を送らせた」とあるのみで、劉龍田本と嘉靖本には「蔣顯をして姜維に敕を遣った」という史書と同じ記述もある。但し三本共に次葉に「又遣大僕蔣顯出招姜維等」(劉龍田本と嘉靖本では「蔣顯」ではなく単に「人」という同内容の文がある。誤って二重になっていたのを余象斗本が削ったとも考えられるし、史書を参照して補った結果劉龍田本と嘉靖本では二重になったとも考えられる。

②波線部は劉龍田本と嘉靖本の文章が史書に近く、余象斗本は簡略な文章となっている。わざわざ史書を参照して改訂する必要があるほど重要な内容ではないことから、劉龍田本と嘉靖本が原演義に近く、余象斗本が簡略化したと考えるのが妥当であろう。

○ 16 b 6 行 (余) ↓ (劉) (嘉)へ洗練か。

(余) 魏兵在外、主上送納降款。

(劉) 魏兵將近、父王寫納降書。

(嘉) 魏兵將近、父王已納降款。

劉諶から劉禪への台詞であるから、劉龍田本と嘉靖本のように「父王」と呼びかける方が自然で洗練されているように思われる。

○ 16 b 7 行 (余) ↓ (劉) (嘉)へ洗練か。

(余) 汝當先殺於我、你死亦未遲……汝之事父、我之事夫。其義一也。

(劉) 妾請先死、王死未遲……王死事父、妾死事夫、其義皆然。

(嘉) 妾請先死、王死未遲……王死事父、妾死事夫、其義皆然。

余象斗本は稚拙だったり口語的だったりするが、劉龍田本と嘉靖本は全体的に洗練された口調となっており、劉諶の妻の台詞としてふさわしい。

○ 16 b 14 行 (余) (劉) ↓ (嘉)へ史書から蕭常の論を増補か(『漢本末』)。

(余) なし

(劉) なし

(嘉) 蕭常論曰……尚庶幾不亡、悲夫。

○ 16 b 15 行 (余) ↓ (劉) ↓ (嘉)へ洗練か。「扶起後主」は余象斗本が省略の可能性もあり。

(余) 次日君臣面縛同出、左右扶輿縹……鄧艾大軍已到、見蜀君臣

伏道。艾下馬、親解其縛燒襪、乘輿縹與後主同入成都。

(劉) 次日君臣面縛 左右扶輿縹……鄧艾 見後主君臣

伏道。艾下馬、親解其縛燒襪、乘輿縹與後主同入成都。

(劉) 次日君臣面縛 左右扶輿縹……鄧艾 見後主君臣

伏道。艾下馬、親解其縛燒襪、乘輿縹與後主同入成都。

伏道。艾下馬扶起後主、親釋其縛焚其輿襯、與後主並車入城。

(嘉) 次日魏兵大至、後主率太子諸王及群臣六十餘人、面縛輿襯

……鄧艾 扶起後主、親解其縛焚其輿襯、並車入城。

劉龍田本は基本的に余象斗本に一致するが、点線部の「焚其輿襯」並車入城」という文面は嘉靖本に一致し、余象斗本より洗練された口調に感じられる。余象斗本から劉龍田本、劉龍田本から嘉靖本へ洗練を目的とした書き換えが施されたことを示している。

○17 a 6行 基本的に(余) ↓ (劉) (嘉) へ洗練か。

(余) 蜀人香花燈燭迎門而接。艾差官分投出榜安民、交割倉庫、權加後主為驃騎將軍、其餘官員別聽明降。

(劉) 成都之人皆香花燈燭迎接。艾拜後主為驃騎將軍、太子為奉車都尉、諸王皆為駙馬都尉、文武各、陞職、後主還宮。出榜安民。

(嘉) 於是成都之人皆以香花而迎。艾拜後主為驃騎將軍、太子為奉車都尉、諸王皆為駙馬都尉、文武各隨高下拜官、請後主還宮。出

榜安民、交割倉庫。

①鄧艾が成都へ入場した場面であるから、傍線部は余象斗本のように「蜀人」とするよりも劉龍田本と嘉靖本のように「成都之人」とする方がふさわしい。余象斗本の二重傍線部には「明降」(はつきりとした裁決)という元代に多用されていた語彙が使われており、古い文体を残している。網掛部の位置が劉龍田本と嘉靖本で最後になっているのは、後主や諸王に関する記述の方が重要で先に述べるべきという意識が働き、改変した結果と考えられる。全体的に余象斗本が原演義に近く、劉龍田本と嘉靖本には書き換えが施されているといえる。

②劉龍田本と嘉靖本の波線部「太子為奉車都尉」が余象斗本と嘉靖本に無いのは簡略化されたためか。

●17 a 7行 (余) (劉) ↓ (嘉) へ史書に拠り校訂か、(嘉) が史書に近い ↓ (余) (劉) へ省略か判断つかず。

(余) 艾欲收黃皓殺之。皓將金錦厚賂左右、因此得免。艾遣太常張俊……出招姜維等。

(劉) 艾將黃皓殺之。皓將金寶厚賂左右、因此得免。艾又使太常張峻……說姜維來降。

(嘉) 又令太常張峻……說姜維歸降。艾聞黃皓姦險、欲捉來、斬之。賄用金寶賂其左右、因此得免。

(三) 及鄧艾至蜀、聞皓姦險、收閉、將殺之、而皓厚賂艾左右、得免。

①網掛部の位置が嘉靖本のみ異なるが、どちらが原演義に近いかは判断つかず。この前後の段ではこのような文章の位置の異同が非常に多い。

②傍線部、嘉靖本には史書に近い「姦險、捉來」の字がある。余象斗本と劉龍田本が原演義に近く、史書を参照して改訂した結果嘉靖本のような文章になったのか、嘉靖本が原演義に近く余象斗本と劉龍田本が省略したのか、判断がつかない。

●17 a 15行 (余) (劉) ↓ (嘉) へ史書から陳壽による評(蜀の滅亡について)を増補か(「三國志」)。

(余) なし
(劉) なし

(嘉) 評曰、後主任賢相……優劣者矣。

○17 a 16行 (余) (劉) ↓ (嘉) へ、洗練か。

(余) 鄧艾既得成都、差人往洛陽飛報邊功。

(劉) 艾既得成都、差人往洛陽飛報邊功。

(嘉) 鄧艾取了成都、遣人入洛陽報捷去了。

傍線部と二重傍線部、嘉靖本は完了の「了」を用いて一番読みやすくなっている。

○17 b 1行 (余) ↓ (劉) (嘉) へ洗練か。部分的には(劉) (嘉) ↓ (余) へ簡略化の可能性も。

(余) 帳上帳下許多將士、一齊發怒、大呼曰、「吾等皆欲死戰、何故先降也。」

(劉) 維大驚失語、帳下衆將聞知、一齊怨怒、咬牙怒目、鬚髮倒豎、拔劍斫石、大叫曰、「吾等死戰、何故先降耶。」

(嘉) 維大驚失語、帳下衆將聽知、一齊怨怒、咬牙怒目、鬚髮倒豎、拔刀斫石、大呼曰、「吾等死戰、何故先降耶。」

傍線部、劉龍田本と嘉靖本の方が簡にして要を得た洗練された口調である。波線部は劉龍田本と嘉靖本にあつて余象斗本に無く、余象斗本が簡略化した可能性もある。

○17 b 2行 (余) ↓ (劉) (嘉) へ、洗練か。

(余) 姜維見如此、乃喚諸將曰、「吾有一良謀、汝等勿憂也。」

(劉) 維見衆心歸漢、乃慰之曰、「衆等勿憂、吾有一計。」

(嘉) 維見人心歸漢、乃以善言撫之曰、「衆將勿憂、吾有一計。」

傍線部、余象斗本の文章は稚拙で、劉龍田本と嘉靖本は「人心歸漢」と漢字復興及び忠義が強調された洗練された口調である。波線部はど

ちらが原演義に近い判断つかず。

【第三六則 鍾雲鄧艾大争功】

○17 b 5行 (余) ↓ (劉) ↓ (嘉) へ洗練か。点線部は(余) が省略の可能性もあり。

(余) 姜維喚幾個心腹之士上帳、耳授其言。衆皆領命而喜。備問蔣顯消息、成都投降之事、尽已知之。

(劉) 姜維與衆將附耳低言、說了計策。維問蔣顯消息、顯曰、「鄧艾坐據成都、令主先降、勅使各軍倒戈卸甲、尽已歸降。」

(嘉) 姜維與諸將附耳低言、說了計策。此是姜維詐降於中取事也。維請蔣顯問其消息、顯曰、「鄧艾坐據成都、令主上降、勅使各軍倒戈卸甲、盡已歸附。」

傍線部は劉龍田本と嘉靖本の方が簡にして要を得ている。波線部、余象斗本では「備問」の主語が無く舌足らずであるが、劉龍田本と嘉靖本では「維」と主語があつて読みやすい。点線部は余象斗本が簡略化を施して稚拙になったのか、原演義が余象斗本のような稚拙な文章だったのを書き換えた結果、劉龍田本と嘉靖本のような文章になったのか、判断がつかない。

●17 b 10行 (余) ↓ (劉) (嘉) へ史書を参照して改訂か(『蜀漢本末』)。

(余) 其間將軍大名如雙雷灌耳、甘心屈膝而事之。

(劉) 聞將軍自淮南以來、俱是良策、司馬氏之盛、皆將軍之力。維甘心以事將軍。

(嘉) 聞將軍自淮南以來、算無遺策、司馬氏之威、皆將軍之力。維甘

心事之。

(蜀) 聞君自淮南已來、筭無遺策、司馬氏之盛、皆君之力。

姜維が鍾會に下る場面の台詞である。傍線部、劉龍田本と嘉靖本は史書の文面と一致するが、後に姜維が鍾會に反逆を勧める場面の台詞にも同じ文章があり(20a)、劉龍田本と嘉靖本は二カ所で史書の同じ部分を利用したことになる。原演義は余象斗本のように一カ所であったのを、そうと気付かず再度史書に拠って改訂した結果、劉龍田本と嘉靖本のように重複してしまったのだろう。

●17b14行 (余) ↓ (劉) (嘉) へ史書を参照して改訂か(『三國志』)。

(余) 辛弘・王傾各領兵守綿竹、勒石以彰戰功。

(劉) 辛弘・王傾等各領州郡牧、又於綿竹築臺、以彰戰功。

(嘉) 牽弘・王傾等各領州郡、又於綿竹築臺、以彰戰功。

(三) 隴西太守牽弘等領蜀中諸郡。使於綿竹築臺以爲京觀、用彰戰功。

『三國志』は「使於綿竹築臺以爲京觀、用彰戰功」(綿竹に台を築かせ京觀とし、戰功をあらわした)の主語「鄧艾」を省略しているうえ、「京觀」(敵の屍首を集めて作る高塚)という語が一般的な語ではないため知識の無い者には読みにくい。余象斗本の文章も「兵守」の後で句が切れるのか「勒石」の後で切れるのかよくわからなかったり、主語が無かったり、史書の「築臺以爲京觀」の意味がわからなかったためか、「勒石戰功」(石に名を刻んで戰功をあらわした)という稚拙な文章になっている。そのため史書の元記事を確認する作業が行われ、劉龍田本、嘉靖本のような文章に書き換えたのだろう。劉龍田本、嘉靖本のように問題の無い文章を余象斗本のように書き換えることはあ

るまい。

○17b15行 (余) ↓ (劉) (嘉) へ洗練。

(余) 遇於我

(劉) 遇我

(嘉) 遇我

「動詞＋於＋目的語」は動作の対象を強調する語法であり、余象斗本には多く見られるが劉龍田本と嘉靖本には少ない。「於」の字が無くても意味は同じなので劉龍田本と嘉靖本では省略されたのだろう。

●17b16行 一部(余) ↓ (劉) (嘉) へ改変、一部(劉) (嘉) ↓ (余) へ改変か。

(余) 鄧艾曰、「姜維自恃一時之英雄、撞了鄧艾、却不能展手。」文武

皆領其功德、心中暗笑甚自負也。

(劉) ……姜維自恃其勇、勉強與我相持、致此窮矣。」衆官起身拜領

艾之德。艾甚喜之。

(嘉) 艾又曰、「姜維只是一時之雄兒也、勉強與吾相持、故致此窮耳。」

衆皆稱頌鄧艾之德。艾甚喜之。

(三) (鄧艾) 又曰、「姜維自一時雄兒也、與某相值、故窮耳。」有識者笑之。

波線部は劉龍田本と嘉靖本が史書に近く、二重傍線部は余象斗本が史書に近い。おそらく原演義は史書にかなり忠実であったのを、それぞれが書き換えた結果であろう。

●18b2行 (余) ↓ (劉) (嘉) へ史書を参照して改訂か(『三國志』

『資治通鑑』『綱目』)。

(余) 來使又賢出晋公手教。其意曰、「昨書中事、須當申報、不宜輒行。」

(劉) 監軍衛瓘取出司馬 手教與艾曰、「我_レ昨觀此書中之事。須當請奏、不可妄行。」

(嘉) 監軍衛瓘取出司馬昭手書與艾曰、「瓘日昨觀此書中之事。須當報奏、不可輒行。」

①晋公司馬昭が鄧艾へ派遣した使者は余象斗本では匿名の「來使」、劉龍田本と嘉靖本では「監軍衛瓘」とする。この使者を都へ歸す際、余象斗本が「便發使回」(すぐに使者を歸した)とやはり匿名にしているのは問題無いが、劉龍田本と嘉靖本が「鄧艾」令來使發赴洛陽。……忽使命回、呈上鄧艾之書」(鄧艾は)使者に手紙を持たせて洛陽へ行かせた……にわかには使者が戻り、鄧艾の書を差し上げた)と匿名にしているのは不自然である。そもそも衛瓘はこの前後の話でも一貫して鍾会の元にいるので、ここで司馬昭の使者として衛瓘が遣わされるのはおかしい。元は余象斗本のように統一された文章だったのを、史書の「文王使監軍衛瓘喻艾」(文王は監軍衛瓘をして艾を諭さしめた) (『三國志』魏書第二十八「鄧艾傳」。『資治通鑑』『綱目』にも同内容の記述あり)を参照し、使者を衛瓘に書き直した結果、劉龍田本と嘉靖本のような不自然な文章となったのである。

②波線部、余象斗本は「前の書中の事(前に鄧艾が司馬昭へ奏上した書)」とするが、劉龍田本と嘉靖本では「私は昨日この書の事(衛瓘が取り出した司馬昭の手教)を見ました」とし、「昨」の字の意味が「以前の」から「昨日」へ変わり、それに伴って「書」の指すものが「鄧艾が司馬昭へ奏上した書」から「司馬昭の手教」に変わっている。「昨」の字を「前」の意で使うことは珍しいため、「昨日」の意に誤読され

て劉龍田本と嘉靖本のように書き換えられたと考えられる。

○19 a 9行目 (余) ↓ (劉) (嘉) へ洗練(但し結果的に稚拙に)。

(余) 維曰、「若孔明於茅廬未出之時……民殷國富、高祖因此以成帝業。」

(劉) 曰、「昔日武侯未出茅廬 時……民殷國富、可為霸業、先帝因此遂創成都。」

(嘉) 曰、「昔日武侯 出茅廬 時……民殷國富、可為霸業、先帝因此遂創成都矣。」

姜維が諸葛亮の昔日の台詞を引用している。余象斗本では漢の高祖劉邦が四川の地に拠って霸業を成したことに言及し、これは第七五則「定三分諸葛出茅廬」の諸葛亮の台詞と一致するが、劉龍田本と嘉靖本はこれを踏まえ、先帝(劉備)を主語にしてこの句を書き換えている。

●19 b 4行目 (余) が史書に近い ↓ (劉) (嘉) へ洗練。

(余) 昭笑曰、「……吾今此行、非為艾、實為會也。」悌悟之言、亦笑。

昭曰、「此事只你我知之、不可漏泄。吾以信義待人、人不負我也。……」

(劉) 昭笑曰、「……吾今此行、非為鄧艾、實為鍾會耳。」邵悌咲曰、「悌已知之、故相問矣。此言切勿漏泄。」司馬昭曰、「吾以信義待人、人必不負吾也。……」

(嘉) 昭笑曰、「……吾今此行、非為艾、實為會耳。」悌笑曰、「悌已知之、故相問也。此言切不可泄漏。」昭曰、「吾自以信義待人、人必不負吾也。……」

(三) 文王曰、「…此言不可宣也。我要自當以信義待人、但人不當負我。……」

傍線部、余象斗本では「不可漏泄」は史書と同じく司馬昭の台詞である。文脈的にも問題は無いが、「悌悟之言」(邵悌はこの言葉の意を悟り)がやや舌足らずなのと、返答がただ笑うだけというのは物足りない感があるため、劉龍田本と嘉靖本では「不可漏泄」までを邵悌の台詞に書き換えたのだと考えられる。

【第三七則 姜維一計害三賢】

○20 b 12行 (余) ↓ (嘉) へ洗練。(劉) は簡本。

(余) 建出見。會曰、「命你監臨、無令走透消息。」建曰、「主公勿憂。

建自監之。」建至宮門、先喚胡烈親信人入、烈告以其事、密寫與子胡淵、建自領出門、會不疑。

(劉) 遂出告會曰、「主公監諸將在內、水食不便、令一人往來傳通。」

會令丘建監臨、分付曰、「吾以重事托汝、勿漏洩。」建曰、「主公放心。某有嚴法。」建暗通胡烈、即以密書付到胡淵營內。

(嘉) 遂出告會曰、「主公軟監諸將在內、水食不便、可令一人往來傳通。」會素納建之言、遂令丘建監臨。會分付曰、「吾以重事託汝。

汝勿泄漏。」建曰、「主公放心。某自有謹嚴之法。」建暗令胡烈親信人入內、烈以密書付其人、其人持書、火速到胡淵營內、細

言其事、呈上密書。

余象斗本は劉龍田本と嘉靖本の網掛部「會」の間を目移りして傍線部を脱文したものとみられる。波線部、余象斗本のように「喚」を使

役的な用法で用いるのは珍しく、「喚」は普通「呼びつける」の意。使役には「交」「教」「令」などを用いる)、嘉靖本では「令」と読みやすい一般的な字になっている。余象斗本の「建自領出門、會不疑」は「建は自ら(胡烈の密書を受けた側近を)連れて門を出たが、會は疑わなかった」と解釈されるが、舌足らずで文意が取りにくく、嘉靖本では「其人持書、火速到胡淵營內、細言其事、呈上密書」(その人は書を持って早急に胡淵の陣營へ行き、具にその事を告げて密書を捧げた)と読みやすくなっている。嘉靖本のように読みやすい文章を余象斗本のように読みにくく改変するとは考えにくいので、余象斗本から嘉靖本への改変と考えられる(劉龍田本はここではどちらの簡本かわからない)。

●21 b 2行 (余) 史書に近い↓(劉) (嘉) へ洗練。

(余) 衆軍碎割姜維到腹辺、見其膽如斗大。

(劉) 魏兵争割姜維腹内、胆大如雞卵。

(嘉) 魏兵互相争割維腹、其膽大如雞卵。

(三注) 維死時見割、膽如斗大。

傍線部、余象斗本の文章は稚拙で読みにくい。波線部、余象斗本では「心臓は枘の如く大きかった」という『三國志』裴松之注と同じ文章だが、劉龍田本と嘉靖本では「鶏卵の如し」と改変されている。

○21 b 6行 (余) ↓(劉) (嘉) へ洗練。

(余) 衛瓘遣田續將五百軍馬、於路接出、果然接到綿竹、正遇鄧艾父子。

(劉) 瓘大喜、即遣 引兵五百、逕至綿竹、正遇 艾。

(嘉) 瓘大喜、遂遣田續引五百兵、趕至綿竹、正遇鄧艾父子。

傍線部、余象斗本のように「將」を「率いる」の意で用いることは珍しい（普通は「領」「率」「引」などを用いる）。波線部も劉龍田本と嘉靖本の方が簡にして要を得た文章になっている。

●22 a 6行 (余) (劉) ↓ (嘉) へ史書から鍾会と鄧艾についての評を増補(『三國志』)と、姜維の評(『三國志』裴松之注、『蜀漢本末』にあるが『蜀漢本末』に一致)を増補か。

(余) なし
(劉) なし

(嘉) 又史官評鍾會・鄧艾曰、王凌、風節格尚。……此盖古人所謂自論者也。後裴松之辨姜維曰、盛之譏維、誠為不當。……復可謂之愚闇哉。

○22 a 8行 (余) ↓ (嘉) へ洗練か。(劉) は簡本。

(余) 賈充 至、出榜安民、方始寧靜、留衛瑾守成都、招諭離散之民還業。

(劉) 賈充先至、出榜安民、留衛瑾守成都。

(嘉) 賈充先至、出榜安民、方始寧靜、留衛瑾守成都、此時軍民安堵、秋毫無犯。

傍線部、余象斗本は「仕事に戻るよう離散した民を諭した」という珍しい言い回しで、嘉靖本は「この時兵士と民は落ち着き、少しも侵犯することがなかった」と一般的な言い回しになっている。

【第二三八則 司馬炎復奪受禪臺】

●22 a 15行 (余) が史書に近い↓(劉) (嘉) へ洗練。

(余) 中書丞華覈上表於吳主孫休曰、「伏聞成都不守……」

(劉) 中書丞華覈上表與吳主孫休曰、「惟吳蜀乃唇齒也。成都失守……」

(嘉) 中書丞華覈上表與吳主孫休曰、「伏惟吳蜀乃唇齒也。成都失守……」

(綱) 中書丞華覈詣宮門上表曰、「伏聞成都不守……」

傍線部、余象斗本が史書に近く、劉龍田本と嘉靖本では改変されたものとみられる。

○22 b 4行 (余) ↓ (劉) (嘉) へ洗練。

(余) 却説後主刘禅至洛陽、時司馬昭已自回軍了。侍臣引後主人内朝、見魏君即拜公堂、再拜於殿下。魏主曹奐令司馬昭定擬官爵。昭曰……

(劉) 且説後主劉禪至洛陽、見魏主曹奐拜伏殿下、司馬昭回朝、責禪曰……

(嘉) 却説後主劉禪至洛陽、入内見魏主曹奐拜伏殿下、時司馬昭已自回朝、昭責之曰……

網掛部の位置が余象斗本では傍線部の前、劉龍田本と嘉靖本では後になっている。これに伴って傍線部の文章も劉龍田本と嘉靖本はより簡にして要を得た文章になっている。余象斗本の波線部「魏主曹奐は司馬昭に官爵を裁量させた」も特に必要では無いため劉龍田本と嘉靖本では省略されたのだろう。

句の位置が入れ替わるといふ異同はこの前後に多く見られ、第二三八則だけでも七例数えられる。概ね劉龍田本及び嘉靖本が小説の

文体として読みやすく洗練されている。

●22 b 6行 (劉) (嘉) が史書に近い↓(余)へ簡略化か。

(余) 加為安樂公、賜住宅・月給・俸米、隨行郤正等皆封為列侯。

(劉) 封汝 為安樂公、賜住宅・給俸米、賜絹萬匹、奴婢百人、子

劉瑾及群臣樊建・譙周・郤正等皆封侯爵。

(嘉) 今封汝為安樂公、賜住宅・月給請受、賜絹萬疋、奴婢百人、子

劉瑤及群臣樊建・譙周・郤正等皆封侯爵。

(三) 使太常嘉命劉禪為安樂縣公。……食邑萬戶、賜絹萬匹、奴婢百

人、他物稱是。子孫為三都尉封侯者五十餘人。尚書令樊建・侍

中張紹・光祿大夫譙周・秘書令郤正・殿中督張通並封列侯。

劉龍田本と嘉靖本の傍線部は余象斗本に無い。波線部、劉龍田本と嘉靖本には史書と同じく樊建と譙周の名が見えるが、余象斗本には二人の名は無い。史書を参照して補うほどの内容でも無いことから、劉

龍田本と嘉靖本が原演義に近く、余象斗本が簡略化したとみなすのが妥当と思われる。

●23 a 9行 (余) (劉) が史書に近い↓(嘉)へ洗練。

(余) 昭常言曰、「天下者、吾兄之天下也。百年之後、大業大付司馬馬攸。」

(劉) 昭常 曰、「天下者、乃吾兄之天下也。百年之後、大業宜付司馬攸。」

馬攸。」

(嘉) 昭常 曰、「天下者、乃吾兄之天下也。」

(綱) 昭愛之、常曰、「天下者、景王之天下也。吾百年後、大業宜歸攸。」

傍線部、波線部とも余象斗本と劉龍田本が史書に一致する。直前に

司馬昭は兄の司馬師(景王)に世継ぎが無いため息子の攸を養子に出

したという記述があり、余象斗本と劉龍田本のように司馬昭が「天下は兄のもので、百年後には攸が継ぐ」と言うのは文脈的に整合性がある。嘉靖本は司馬昭の台詞を単に「天下は私の息子の天下である」としているの、養子の件が活かされていない。

○23 b 14行 (余) ↓(劉) (嘉)へ洗練。但し一部(劉)のみ改変。

(余) 炎 直入後宮、與 大驚避席 迎之、賜墩而坐。炎問樊曰、

「陛下為君、何人之力。」

(劉) 只見晋王帶劍入宮、魏主慌下御榻 迎炎。坐而問曰、「魏之

天下、誰人之力也。」

(嘉) 炎 直入後宮、與 慌下御榻而迎之、坐畢。炎問曰「魏之天下、誰 之力也。」

①司馬炎が魏主に禪讓を迫る場面。波線部、余象斗本は「陛下が君たるのは誰の力だ」、劉龍田本と嘉靖本は「魏の天下は誰の力だ」となっており、劉龍田本と嘉靖本の方がオブラートな言い回しで洗練されている。

②傍線部は劉龍田本のみ独自に書き換えたものとみられる。司馬炎が「劍を帯びて」宮中に入るとい記述は直前の文章にも見え、しかも余象斗本や劉龍田本などの上図下文の版本では上図の脇に付される解題にも見えることから(余象斗本は「司馬炎帶劍入宮欺帝」、劉龍田本は「晋王帶劍挾天子」、「帶劍」を強調しようという意図が伺われる。司馬炎の不遜を強調するためか。また劉龍田本が地の文で司馬炎を「晋王」と称するのはここだけであり、書き換えを施したことに由

来する呼称の不統一と考えられる。

○24 a 3 行 一部(余)(劉) ↓ (嘉) へ洗練。一部(余) が簡略化
なのか、(劉) (嘉) が改変して長くなったのか判断つかず。

(余) 炎大怒叱之曰、「此天下乃漢家之天也。曹氏仗功而奪之。」

(劉) 炎 怒 曰、「此天下乃漢家 天下。曹氏倚挾漢相、挾天子令諸侯、自立為王、篡逆漢室。」

(嘉) 炎大怒 曰、「此社稷乃大漢之社稷也。曹操倚仗漢相之資、挾天子令諸侯、自立魏主、篡逆漢室。」

劉龍田本の傍線部は余象斗本に一致し、波線部は嘉靖本に一致する。劉龍田本は余象斗本と嘉靖本の中間段階を示している。嘉靖本の波線部は「社稷」と洗練された口調になっているため、余象斗本から嘉靖本へ改変が施された可能性が高い。

○24 a 3 行 (余) ↓ (劉) (嘉) へ洗練。

(余) 吾父祖於魏三世有功。

(劉) 吾家 三世輔魏。

(嘉) 吾祖父 三世輔魏。

余象斗本より劉龍田本と嘉靖本の方が簡にして要を得た文章になっている。

○24 a 13 行 (余) ↓ (劉) (嘉) へ洗練か。

(余) 魏主曹奐親捧傳國玺登壇、授與晉王了、然後下壇。

(劉) 魏主 親捧 玉璽立于臺上、大會文武、請 司馬炎登臺、

受 大札、魏主更公服、下臺。

(嘉) 奐親捧傳國璽立於臺上、大會文武、請晉王司馬炎登臺、

授與大禮、 輿下臺。

余象斗本は波線部、二重傍線部とも描写能力が稚拙で読みにくい。劉龍田本と嘉靖本は詳しく読みやすい文章となっている。

●24 b 12 行 (余)(劉) ↓ (嘉) へ史書から曹奐の評を増補(『三國志』)。

(余) なし

(劉) なし

(嘉) 評曰、古者以天下為公、……比之山陽、班龍加焉。

【第二三九則 羊祐病重薦杜預】
●25 a 7 行 (余) ↓ (劉) (嘉) へ史書から増補か、或いは(余)が省略か判断つかず。

(余) なし

(劉) 次年改為甘露元年

(嘉) 次年改為甘露元年

●25 a 10 行 (余) ↓ (劉) (嘉) へ史書から増補か、或いは(余)が省略か判断つかず。

(余) なし

(劉) 又改 興衡元年

(嘉) 又改元建衡元年

この前後には孫皓の暴虐の様子が描かれているので、劉龍田本と嘉靖本のように何度も改元したことに言及する方がふさわしい。しかし劉龍田本と嘉靖本で増補されたのか、余象斗本で簡略化されたのか断定は難しい。

●25 a 16行 (余)は『綱目』に近い↓(嘉)は『資治通鑑』を参照して増補。(劉)は簡本のため無し。

(余)

運期雖天所受、而功業必因人而成。今不 大宰掃滅、則兵役無時休息也。昔蜀之為

国……孫皓之暴、過於劉禪矣。

(劉)なし

(嘉) 先帝西平巴蜀、南和吳會、庶幾海内得以休息。而吳復背信、使邊事興。夫期運雖天所授、其功 必因人而成。 不一大舉掃滅、則兵役無時得息也。蜀平之時、天下皆謂吳當併亡…… 蜀之為國……孫皓之暴、過於劉禪。

(綱)

期運雖天所授、而功業必因人而成。 不一大舉掃滅、

則兵役無時得息也。 夫蜀之

爲國……孫皓之暴、過於劉禪。

(資)

先帝西平巴蜀、南和吳會、庶幾海内得以休息。而吳復背信、使邊事更興。夫期運雖天所授、而功業必因人而成。 不一大舉掃滅、則兵役無時得息也。蜀平之時、天下皆謂吳當併亡……蜀之爲國……孫皓之暴、過於劉禪。

傍線部と波線部、余象斗本に無い部分は『綱目』に無い部分と一致し、嘉靖本は『資治通鑑』に同じくその部分の文章が備わっている。嘉靖本のような文章から余象斗本へ『綱目』と同じように省略するという作業は考えにくいため、余象斗本が原演義に近く、嘉靖本は『資治通

鑑』を参照して増補したものとみられる。

●25 b 11行 (余)が史書に近い↓(劉)(嘉)へ省略。

(余) 祐曰、「臣年老多疾、難領此職、願陛下 選智勇之士、征行。

平吳之後、愿圣主无以平吳、為喜。」

(劉) 祐曰、「臣年邁多病、不堪重任、陛下可選智勇之士、可也。」

(嘉) 祐曰、「臣年邁多病、不堪領此職、陛下 選智勇之士、可也。」

(綱) 祐曰、「取吳不必臣行。但既平之後、當勞聖慮耳。……」

余象斗本の傍線部「吳を平定した後、聖主が再び呉を平定する(平定に向かう)ことがございませんならば、(私の)喜びです」は、史書の「ただ平定の後、お心遣いをいただければ幸いです」に対応するが、劉龍田本と嘉靖本には無い。余象斗本が原演義に近く、文章が稚拙なために劉龍田本と嘉靖本が省略したものとみられる。余象斗本がこの部分でわざわざ史書を参照して増補したならば、校訂者には史書の文章に忠実にしようという意志があったはずであるが、余象斗本の文章は史書をアレンジしたものととなっていることから、この可能性は否定される。

○25 b 13行 (余)↓(劉)(嘉)へ洗練か。一部(劉)(嘉)↓(余)

へ脱落の可能性もあり。

(余) 帝謝之、
命 輦歸京師、賜宅養病。

(劉) 炎起身稱謝、祐辭出、
命 炎命祐乘王輦歸家。

(嘉) 炎起身稱謝、祐辭炎出内、
命 炎命祐乘王輦歸家。

波線部、余象斗本の文章でも文意はとれるが、「命」の後に目的語の「祐」が無いのはやや舌足らずに思われる。また余象斗本の「歸京

師」は劉龍田本と嘉靖本で「歸家」と簡潔に改変されたものとみられる。傍線部は余象斗本に無く、二重傍線部は劉龍田本と嘉靖本に無いが、どちらが古い形か判断がつかない。

●26 a 7行 一部(余)が史書に近い↓(劉)(嘉)へ洗練。一部(劉)が史書に近い↓(余)へ改変(結果稚拙に)、省略。

(嘉) 羊祐死後、南州居民聞知、罷市巷哭、吳守邊將士亦皆

辛亥。祐在襄時、常遊峴山。人思其德、與建廟立碑於山上。但

望見碑牌、無不下淚。…(胡曾詩)…因此號石碑為墮淚碑。

(劉) 百姓知羊祐身死、滿市盡哭、江南守邊吳將亦皆

舉哀。襄陽人思羊祐存日曾遊峴山、遂建廟立碑、四時祭之。

往來人見碑、無不下淚。故稱為墮淚碑。

(嘉) 南州百姓聞羊祐身死、罷市而哭、江南守邊吳將亦皆

舉哀。襄陽人思祐存日常遊於峴山、遂建廟立碑、四時祭之。往

來人觀其碑文者、無不流涕。故稱為墮淚碑。

(綱) 南州民間祐卒、罷市巷哭。吳守邊將士亦為之泣。祐好遊峴山、

襄陽人建碑立廟於其地、歲時祭祀、望其碑者無不流涕、因謂之

墮淚碑。

傍線部と波線部の文面は余象斗本が史書に一致し、劉龍田本と嘉靖本はわかりやすく書き換えた結果史書から離れたものとみられる。二重傍線部と点線部については、句の順序は余象斗本が史書に一致するが、史書の「襄陽人」「歲時祭祀」に対応する語は劉龍田本、嘉靖本のみに見られる。原演義は史書にかなり近かったのを、それぞれが書き換えた結果であろう。

●26 b 1行 (余)が史書に近い↓(劉)(嘉)へ洗練。

(余) 克固陳伐吳不利、臣襄老、不堪元帥之職。」

(劉) 賈充奏曰、「臣年老、不堪元帥之任。」

(嘉) 充奏曰、「臣年耄衰老、不堪元帥之任。」

(資) 充固陳伐吳不利、且自言衰老、不堪元帥之任。」

余象斗本は傍線部を史書の文面と同じく「充は頑なに伐呉は不利であると陳べた」とするが、その直後に「臣」という自称があるので、間接話法と直接話法が入り交じって読みにくい。劉龍田本と嘉靖本では傍線部を「充が奏して曰く」として直接話法に統一している。その結果史書の文面から離れている。

○26 b 8行 (余)↓(劉)(嘉)へ簡略化。

(余) 有一心腹愛幸官人、官拜中常侍、姓岑、名昏、見皓憂悶而問之。

(劉) 有 幸臣 岑 昏、 問其

故。

(嘉) 有 幸臣 中常侍 岑 昏、 問其

故。

余象斗本は傍線部を「愛幸官」(寵愛を受ける臣下)、劉龍田本と嘉靖本は「幸官」とする。劉龍田本と嘉靖本のような「幸臣」という二音節且つわかりやすい語にわざわざ「愛」を付け加えるという改変は考えにくいので、原演義は余象斗本に近く、劉龍田本と嘉靖本が簡略化を施したものと考えられる。

【第二四〇則 王濬計取石頭城】

○26 b 15行 (余) ↓ (劉) (嘉) へ洗練。但し (劉) は一部簡本化。

(余) 孫皓大喜、便令大起江南工匠、連夜發遣就沿江要害處、動煇打造鐵鎚鐵索。

(劉) 皓大喜、即 發 工匠、依計而行。

(嘉) 皓大喜、即 發 工匠、於江邊連夜造成鐵索鐵錘、設立停當。

傍線部、劉龍田本と嘉靖本の方が簡にして要を得た文章となつてゐる。傍線部も嘉靖本が最も簡潔で読みやすい (劉龍田本は省略)。

○27 a 3行 (余) ↓ (劉) (嘉) へ洗練。一部余象斗本が簡略化か。

(余) 吳国 伍延兵出旱路、水軍都督陸景從江西進兵、

孫歆為前部、來迎晋兵。 初一交兵、佯敗而

走。東吳陸景令水軍上岸、一齊追趕進、至二十餘里、

四面晋兵大至。

(劉) 人 報 吳主吳主遣伍延 出陸路、 陸景出水路、

孫歆為前鋒、三路兵來。忽 孫歆船到、兩兵初交、杜預便

退。 歆引兵上岸、 趕殺 二十里、一声咆哮、

四面晋兵大至。

(嘉) 前哨報道吳主 遣伍延 出陸路、 陸景出水路、

孫歆為先鋒、三路迎來。言未了、孫歆船到、兩兵初交、杜預便

退。 歆引兵上岸、 進趕追時不到二十里、一聲砲響、

四面晋兵大至。

波線部、余象斗本が「陸景は江西から兵を進めた」とするのに対し、

劉龍田本と嘉靖本が「陸景は水路を進んだ」とするのは、直前の「伍

延は陸路を進んだ」に対応するよう改変した結果であろう。二重傍線部、「佯敗而走」の動作主は杜預であるが、余象斗本には主語が無いため孫歆の行動と誤読される。劉龍田本と嘉靖本では「杜預便退」とわかりやすく書き換えられている。点線部、余象斗本は「陸景は水軍を上陸させ」とするが、劉龍田本と嘉靖本は「孫歆は兵を率いて上陸し」とする。劉龍田本と嘉靖本のようにまず先鋒である孫歆を上陸させる方が文脈的に洗練されているように思われる。

○27 a 11行 (余) ↓ (劉) (嘉) へ洗練か。

(余) 遂引兵進攻武昌、守將開門出降。

(劉) 遂 攻武昌、武昌亦降。

(嘉) 遂 攻武昌、武昌亦降。

余象斗本は傍線部を「門兵は門を開いて降伏した」とするが、劉龍田本と嘉靖本では単に「武昌もまた降伏した」とする。余象斗本の文章では呉が自国の門兵にさえ見放されたというおもしろみはあるものの、なぜ城主でなく門兵が城を明け渡すのかという疑問を生じさせかねない。そこで劉龍田本と嘉靖本のように単純な文章に改変されたのだろう。

●27 a 13行 一部(余)が史書に近い↓(劉)(嘉)へ改変(訛字か)。一部(劉)(嘉)が史書に近い↓(余)へ改変(訛字か)。

(余) 預曰、「昔樂毅濟西一戰、以勝強齊。今兵到此、勢如破竹、數節之後、皆迎刃而解。无復着力處也。可乘勢而取建業。」

(劉) 預曰、「昔樂毅濟西一戰、而併強齊。今兵威大振、可乘勢取建業。」

(嘉) 預曰、「昔樂毅濟西一戰、而併強齊。今兵威既振、如破竹之勢、

皆迎刃而解。无有著手處也。可乘勢而取建業。」

(綱) 預曰、「昔樂毅藉濟西一戰、以并強齊、今兵威已振、譬如破竹、數節之後、皆迎刃而解、無復著手處也。」

傍線部、「以」は余象斗本が、「併」は劉龍田本と嘉靖本が史書に近い。波線部は劉龍田本と嘉靖本が史書に近く、二重傍線部と点線部は余象斗本が史書に近い。どれをとっても校訂者が史書を参照して改訂したというほどの異同ではないことから、原演義が史書の文面にかなり忠実だったのを、それぞれに改変(或いは訛字)した結果と考えられる。

●27b6行 (余) が史書に近い↓(劉) (嘉) へ洗練と省略。

(余) 此時 丞相張悌與 沈瑩・ 諸葛靜屯兵牛渚、使揚

州刺史周俊戰於板橋中、大敗而回。諸葛靜自引兵迎之、望見旌旗蔽空、勢不可當。

(劉) 丞相張悌令左將軍沈瑩・右將軍諸葛靚來戰晉兵。二人

見晉兵順流而下、勢不可當。

(嘉) 却說東吳丞相張悌令左將軍沈瑩・右將軍諸葛靚來迎晉兵。二人

見晉兵順流而下、勢不可當。

(綱) 吳丞相張悌督沈瑩、諸葛靚帥衆至牛渚。……三月、渡江、與晉揚州刺史周俊戰、大敗於板橋。靚欲遁去。

余象斗本の傍線部には史書の記述と同じく「牛渚」という地名が見えるが、劉龍田本と嘉靖本は単に「晋兵を迎え撃った」とする。余象斗本の波線部に名が見える「周俊」は史実では晋将であるが、余象斗本の文章だと「張悌は揚州刺史周俊をして板橋で戦わせたが、大敗して帰った」となるので、周俊は呉将ということになるため(史書

を誤読したか、或いは「使」の後に「與」を脱落させたか)、校訂者がおかしいと考えて省略し、劉龍田本と嘉靖本のような文章になったのだろう。二重傍線部、余象斗本は主語を「諸葛靚」とするが劉龍田本と嘉靖本は「二人」とする。「二人」の方が前句からの流れに整合しているように思われる。

●27b8行 主に(余) が史書に近い↓(劉) (嘉) へ洗練。一部(余) が簡略化と脱落。

(余) 悌曰、「吳之將亡、賢愚共之。今若君臣俱降、無一人死于國難、亦不辱。」悌曰、「吾久食吳祿、位至丞相、今日是吾死日、安可逃生而求不義之名。」

(劉) 悌曰、「國家將亡、榮辱共之。若君臣皆降、無一人死、難

不亦辱乎。」靚曰、「存亡自有天數、非公一人可支吾也。何故自

取其死。」悌曰、「吾幼食吳祿、今位至丞相、得其死矣。吾若

合死、安可求生以遺不義之名也。」

(嘉) 悌曰、「國家將亡、賢愚共之。今若君臣皆降、無一人死於國難、

不亦辱乎。」靚曰、「存亡自有天數、非公一人可支吾也。何故自

取其死。」悌曰、「吾自幼食吳祿、今位至丞相、得其死矣。吾若

合死、安可求生以遺不義之名耶。」

(綱) 悌曰、「吳之將亡、賢愚所知。……君臣俱降、無復一人死難者、

不亦辱乎。」……靚自往牽之曰、「存亡自有天數、非卿一人所支、

奈何故自取死。」悌垂涕曰、「仲思、今日是我死日也。且我爲兒

童時、便爲卿家丞相所識拔、常恐不得其死、負名賢知顧。今以

身徇社稷、復何道耶。」

傍線部、波線部、二重波線部は余象斗本が史書に一致、二重傍線部は劉龍田本と嘉靖本が史書に一致する。点線部は原演義にはあつたの
だろうが、余象斗本は脱落させてしまっている（結果、余象斗本では
「梯曰：梯曰：」と張梯の台詞が続いてしまっている）。原演義は史書
にかなり近かつたのを、それぞれが改変、或いは脱落させた結果であ
ろう。

●28 a 8行 (余) が史書に近い↓(劉) ↓(嘉) へ洗練。

(余) 皓乃 輿襯自縛、引群臣 詣王瀆軍前、投降。瀆親

解其縛 焚 欄。

(劉) 皓從之、亦備輿襯自縛、引群臣 投降。瀆親

釋其縛 焚 欄。

(嘉) 皓從之、亦備輿襯自縛、率諸王文武詣王瀆軍前、歸降。瀆自扶

起釋其縛、燒其輿襯。

(綱) 吳主皓面縛輿襯、詣軍門降。瀆解縛焚欄。

劉龍田本の傍線部は嘉靖本に一致、波線部の「引群臣」「投降」は
余象斗本と一致し、余象斗本と嘉靖本の中間のような本文となつて
いる。さらに二重傍線部、余象斗本は史書の文面と同じく「解」「焚」
の字を使い、劉龍田本は「釋」「焚」、嘉靖本は「釋」「燒」となつて
いることから、余象斗本の文章が原演義に近く、嘉靖本へと段階的に
史書から離れていく様子がわかる。

●28 a 13行 (余) は『資治通鑑』『綱目』に近い↓(劉) (嘉) は『三
國志』を参照して増補。

(余) 克川、郡四十三、軍三十二萬三千、糧二十三萬。

(劉) 東吳四州、四十三郡、三百一十二縣、戸口五十二萬三千、

官吏三萬二千、兵二十三萬、男女老幼二百三十萬口、米谷
二百八十萬斛、舟舡五千餘隻、後宮五千餘人、皆歸大晉。

(嘉) 於是東吳四州、四十三郡、三百一十三縣、戸口五十二萬三千、

官吏三萬二千、兵二十三萬、男女老幼二百三十萬、米穀
二百八十萬斛、舟船五千餘隻、後宮五千餘人、皆歸大晉。

(資) (綱) 克州四、郡四十三、戸五十二萬三千、兵二十三萬。

(三注) 領州四、郡四十三、縣三百一十三、戸五十二萬三千、吏三萬

二千、兵二十三萬、男女口二百三十萬、米穀二百八十萬斛、舟
船五千餘艘、後宮五千餘人。

『資治通鑑』及び『綱目』は『三國志』裴松之注をかなり省略した
文章であり、余象斗本に無い部分はこれに一致する。但し傍線部「克
州四」「四つの州を手に入れ」を「克川」として意味がわからなくな
っているため、劉龍田本と嘉靖本では史書を確認して「東吳の四州と
四十三郡」とわかりやすく改変されたのである。またその際に参照
したのが『三國志』裴松之注であったため、『資治通鑑』及び『綱目』
で省略されていた部分も併せて補われたのだと考えられる。逆に余象
斗本が簡略化を施した結果、簡略の仕方が『資治通鑑』『綱目』とた
またま一致したとは考えにくい。

●28 a 15行 (劉) (嘉) が史書に近い↓(余) へ改変か、(余) ↓(劉)
(嘉) へ史書に一致するよう改変か判断つかず。

(余) 乃孫皓赴洛陽面君、渡江、正迎賈克、王濬請孫皓見賈克。克

曰、「汝在南方、剝人眼睛、剝人面皮、此何等刑也。」皓曰、「人

民有殺君、及奸猾不忠者、則皆受此刑。」克大怒欲殺之。王濬力勸阻之。 晋大康元年夏五月、至洛陽、面君… (晋帝と孫皓の会話) … 帝大笑、設宴待之。

(劉) 遂遷吳主孫皓赴洛陽面君。 時晋大康元年五月、皓

見晋帝… (晋帝と孫皓の会話) … 帝大悅。賈充謂皓曰、「聞君在南方、剝人眼睛、剝人面皮、此何等刑也。」皓曰、「人臣有弒君、及姦回不忠者、故加此刑。」充默然惶恐。

(嘉) 遂迂吳主孫皓赴洛陽面君。 行至洛陽、時 大康元年夏五月、皓登殿稽首以見晋帝… (晋帝と孫皓の会話) … 帝大笑。賈充

曰、「聞君在南方、鑿人目、剝人面皮、此何等刑耶。」皓曰、「人臣弒君、及姦回不忠者、則加此刑。」充默然甚愧。

(資) 琅邪王伷遣使送孫皓及其宗族詣洛陽。 五月丁亥朔、皓至… 皓

登殿稽顙… (晋帝と孫皓の会話) … 賈充謂皓曰、「聞君在南方、鑿人目、剝人面皮、此何等刑也。」皓曰、「人臣有弒其君、及姦回不忠者、則加此刑耳。」充默然甚愧、而皓顔色無怍。

① 網掛部の賈充と孫皓の会話の位置が、劉龍田本と嘉靖本は晋帝と孫皓の会話の後で史書と一致するが、余象斗本では前になっている。賈充が伐呉の大都督に任命されるも征伐中一度も出番が無いため、余象斗本では賈充と孫皓の会話を前に出して、波線部のように「長江を渡ったところでちょうど賈充を迎え、王濬は孫皓を賈充に会わせた」「王濬はこれ(賈充)を強く制止した」とアレンジしたのであろう。しかしどちらが原演義に近いかは判断が難しい。

② 網掛部の文面は劉龍田本と嘉靖本の方が史書に近い。余象斗本は二

重傍線部が「汝」「殺君」「奸猾」「皆受此刑」に変わっており、訛字、或いはわかりやすく書き換えたものとみられる。

● 28 b 4 行 (余) が史書に近い ↓ (劉) (嘉) へ洗練。

(余) 封 為歸命侯、封其子瑾為中郎。

(劉) 封皓為歸命侯、子孫封中郎。

(嘉) 封皓為歸命侯、子孫封中郎。

(三) 其賜號為歸命侯… 皓太子瑾拜中郎、諸子為王者拜郎中。

余象斗本は史書と同じく「孫皓の子、瑾を中郎に封じた」とするが、劉龍田本と嘉靖本は「子孫を中郎に封じた」とする。瑾は『演義』でこれまで登場していないことからここで特別に名を出して言及するのは小説として拙い感があるため、劉龍田本と嘉靖本では「子孫」という普通名詞に書き換えられたのだろう。

● 28 b 11 行 一部(余) ↓ (劉) (嘉) へ誤字、一部(劉) (嘉) ↓ (葉) へ誤字か。

(余) 後來改魏主陳留王曹奐歿於晋太安元年、蜀主安樂公劉禪歿於晋大始元年、吳主歸命侯孫皓歿於晋大康四年。

(劉) 後主 劉禪亡於 大康七年、魏主 曹奐亡於 太康元年、吳主 孫皓亡於 大康四年。

(嘉) 後主 劉禪亡於 大康七年、魏主 曹奐亡於 太康元年、吳主 孫皓亡於 大康四年。

(綱) 晉安樂公劉禪卒。(泰始七年)(二七二) 歸命侯孫皓卒。(太康四年)(二八三) 陳留王曹奐卒。(太安元年)(三〇二)

①劉龍田本と嘉靖本は物語上国が減じた順に記述する。一方、余象斗本は国が減じた順というわけでもなく、没した順というわけでもない。前の話からの流れに合わせるなら孫皓を最初に持つて来るべきであるが、そうでもない。これに規則性を持たせるために劉龍田本と嘉靖本は改変したのだろう。

②孫皓の没年は三本とも史書に一致するが、曹奐の没年は余象斗本が史書に一致する。劉禪の没年は、年号は余象斗本が史書に近いが、「大始」は「太始」と通じるから「泰始」と音が同じ)、数字は劉龍田本と嘉靖本が史書に一致している。原演義が全て史書に拠っていたのを、それぞれが誤った結果であろう。

終盤でもやはり葉逢春本は拙い文章、劉龍田本と嘉靖本はより洗練された文章であり、しかも嘉靖本は劉龍田本よりさらに洗練された文章であることから、葉逢春本が原演義に近く、原演義に第一段階の書き換えを施した簡本系祖本が成立、それを簡本化したのが劉龍田本、簡本系祖本にさらに書き換えを施したのが嘉靖本という継承関係が成り立つ。

書き換えの過程では、史書を再び参照して本文を校訂するという作業がしばしば行われており、改訂者は特に余象斗本の文章が稚拙でわかりにくい部分や、史書との乖離が大きい部分について史書を参照したらしいことが看取される。原演義から簡本系祖本へ至る過程においても既にこのような作業が行われたようであるが、簡本系祖本から嘉靖本へ至る過程では校訂に止まらず、評や疏を史書から増補するとい

う作業も行われたようである。一方で余象斗本の方が史書の文面に近く、劉龍田本、嘉靖本へと史書の文面から離れていくケースも多く存在しているということは、史書を参照することなく、単純に文章の洗練を目的として恣意的に書き換えを施すことも普通に行われていたのである。

また余象斗本の文章が稚拙なのは、洗練が施される以前の状態である場合と、簡略化の結果稚拙になっている場合の二つの可能性があることには注意すべきで、余象斗本はかなり原演義に近いものの原演義そのものではないことを留意しておかなければならない(葉逢春本も然りである)。

最後に、今後の版本研究の参考となるよう、以下に三系統の異同の種類をパターン化したものを示し、後字に資する所としたい。

(i) (余) (劉) ↓ (嘉) へ洗練。

※史書の影響がある場合

・(余) (劉) が史書に近い ↓ (嘉) へ洗練。

・(余) (劉) ↓ (嘉) へ史書を参照して増補、改訂。

(ii) (余) ↓ (劉) (嘉) へ洗練。

※史書の影響がある場合

・(余) が史書に近い ↓ (劉) (嘉) へ洗練。

・(余) ↓ (劉) (嘉) へ史書を参照して増補、改訂。

(iii) (余) ↓ (劉) ↓ (嘉) へ洗練。

(iv) (劉) (嘉) ↓ (余) へ脱落(もしくは簡略化か)、誤字・訛字、

改変(可能性はあるが断定される箇所は無い)。

※ (嘉) ↓ (余) (劉) へ脱落(もしくは簡略化)、誤字訛字、
改変のパターンも考えられなくはないが具体例は見つ
かず。

おわりに

原演義の本文は葉逢春本に近いもので、原演義に第一段階の書き換
えを施した簡本系祖本が成立、それを簡略化したのが劉龍田本を含む
簡本系諸本(但し簡本系諸本が派生する段階で各々本文に独自の改変
を加えている)、簡本系祖本にさらに書き換えを施したのが嘉靖本で
あることはやや疑いの余地があるまい。本論で挙げた多くの例、つ
まり劉龍田本の本文が葉逢春本に一致していたり嘉靖本に一致してい
たりする異同の例はこれを裏付けるに足るであろう。

さらに『演義』の序盤、中盤、終盤で異同の状況が異なっているこ
とが明らかとなった。赤壁の戦い以降、序盤に比べると劉龍田本は嘉
靖本に一致する割合が高くなるが、大幅に割合が高くなるのは終盤の
劉備の死のあたりからである。終盤において原演義から簡本系祖本へ
大幅な書き換えが施された理由は、原演義の終盤の文章が序盤・中盤
に比べてかなり稚拙で読みにくかったためであろう。何故原演義でそ
のような状況が生じていたのかというと、考えられるのは終盤の執筆
者が序盤・中盤の執筆者とは別人であった可能性である。おそらく序
盤・中盤は早くに成立し、その執筆者が小説家として天性の才能を持
っていたか、或いは早くから既に幾度かの洗練が施されて文章的レベ

ルの高い本文となっていた。そこに終盤が追加されるものの、執筆者
の文章力が未熟で、原演義は終盤だけがやたらと読みにくいものであ
った。そこで序盤・中盤の文章レベルに合うよう終盤に大幅な書き換
えが施され、簡本系祖本が成立したのである。

文章の巧拙に限らず、終盤と序盤・中盤との間にはさまざまな点で
違いが認められる。孔明が南蛮王孟獲の反乱を平定するために自ら兵
を率いて征伐に向かう部分は『三國志』(及び裴松之注)などの史書
にみえる「七縱七擒」の事件を素材としたものではあるが、金環三結・
董荼奴・阿会喃・朶思大王・楊鋒・木鹿大王などの南蛮洞主、孟獲の
弟孟優や妻祝融といった架空の人物が次々と登場し、飲むと口がきけ
なくなつて死ぬという毒泉、藤甲兵と呼ばれる南蛮兵士との戦い、木
鹿大王が怪しげな手振りで呪文を唱えて狂風を起すも孔明が扇をひ
と振りすると風が翻るなど、甚だ荒唐無稽な展開で、それまでの『演
義』とは趣きが異なる。しかも『演義』の史実に基づく部分は基本的
に陳寿『三國志』(及び裴松之注)と朱熹『資治通鑑綱目』の記述が
利用されているにも関わらず^{*11}、この南征の部分は趙居信『蜀漢本
末』が利用されている可能性が高く、使用した史書の相違が指摘され
る(詳しくは拙論「『三國志演義』と『蜀漢本末』」参照^{*12})。また蜀・
呉の滅亡が描かれた最後の部分は、本文のほとんどが歴史書の文章を
ただ繋ぎ合わせただけの文章となっており(無論史書の文章にアレ
ンジを加えたものにはなっている)、『演義』の創作と言える部分がほ
無いことも他の部分とは様相が異なる。やはり終盤の執筆者が序盤・
中盤の執筆者とは異なること、成立時期が異なることを示唆している

ように思われる。

そもそも、『演義』が主人公である劉備の死を以て終わっていたとしてもなんら不思議はない。小説としての『演義』が成立する以前、民間において講釈師によって語られる三国志物語が人気を博していたことは孟元老『東京夢華録』（北宋）^{*13}、蘇軾『東坡志林』（北宋）などの資料、そして講談で語られていた三国故事をまとめた（或いは講談の種本だったともいわれる）『全相平話三國志』の成立（元）から看取できるが、その聴衆にとつて格別の思い入れがあったのはやはり自分たちの身分に近い劉備であつたろうし、三国志物語とはその劉備が草鞋編みから蜀漢の皇帝へと成り上がる物語であつたろうことは想像に難くない。『東坡志林』（巻六）には街角で講談に耳を傾ける聴衆の様子が次のように記されている。

王彭嘗云、塗巷中小兒薄劣、其家所厭苦、輒與錢令聚坐聽說古話、至說三國事、聞劉玄德敗、頻眉蹙、有出涕者、聞曹操敗、即喜唱快。以是知君子小人之澤、百世不斬。（巷の子どもは腕白でその家では面倒がられる。そんな時には小錢を与え、集つて坐らせて昔話を聞かせた。三国の事を語る時には、劉玄徳が負けたと聞くと顔をしかめ涙を流す者があり、曹操が負けたと聞くと喜んで喝采した。これを以て君子小人の沢は百世を経ても途絶えることがないと知った。）

そのような大衆に向けて書坊が『演義』のような小説を刊行しようとする際、それが劉備の旗揚げから死までを描いた一代記となるのが自然ではあるまいか。そのように元来は『演義』は劉備の死のあたり

で終わっており、その後、漢室の復興を描くことに主眼をおき、さらに三国の終焉まで描くべきであるという要求が生じて（これには『演義』の主要な刊行地の一つである建陽〔現福建省南平市建陽区〕の書坊では通史志向が強く芽生えていたことが影響しているかもしれない^{*14}）、終盤が新たに増補されたのではなからうか。

但し先にも触れた通り、終盤には序盤・中盤と同様に劉龍田本がほぼ葉逢春本に一致している段も存在している。つまり原演義から簡本系祖本に至る過程でほとんど書き換えが施されなかったということであり、この部分は序盤・中盤と同じ執筆者の手によって早くに成立し、原演義の時点で既に洗練された文章となっていた可能性がある。現在校勘した限りでは、第二〇五則「孔明火燒木柵寨」と第二〇六則「孔明秋夜祭北斗」（孔明の死）や、第二三五則「蜀後主輿襯出降」の序盤（蜀の降魏の冒頭）がそれに当たり、『演義』は元々劉備の死で物語としてはほぼ終わっていたものの、その後、申し訳程度に孔明の死と姜維の北伐の一部、蜀の滅亡の部分が付されていた可能性も視野に入れておくべきで、さらに究明する必要があるだろう。

以上、三系統の版本の異同の考察を通じて、原演義から各版本へ至る過程がかなり明らかになったように思う。この結果を踏まえ、改訂作業に関わったのはどのような人々だったのかという問題、或いは版本ごとこの人物像の変化やそれに伴う受容の変化といった問題まで踏み込んだ研究を今後進めていく所存である。

【注】

- *1 中川諭『三國志演義』版本の研究（汲古書院、一九九八年十二月）参照。
- *2 鄭振鐸『三國志演義的演化』（初出は『小説月報』二十卷第十号、一九二九年）。
- *3 柳存仁「羅貫中講史小説之眞僞性質」（『和風堂文集』一四一八〜一五一五頁、上海古籍出版社、一九九一年）。
- *4 金文京「三國演義」版本試探―建安諸本を中心に―（『集刊東洋學』第六十一號、一九八九年）。
- *5 小松謙「三國志演義」の成立と展開について―嘉靖本と葉逢春本を手がかりに―（『中國文學報』第七十四冊、二〇〇七年十月）。
- *6 拙論「三國志演義」三系統の版本の継承関係―劉龍田本を手がかりに―（『東方學』第百二十七輯、東方学会、二〇一四年一月）。
- *7 拙論「関索説話に関する考察」（『和漢語文研究』第十一号、京都府立大学国文学会、二〇一三年十一月）参照。柳存仁、金文京、中川諭、上田望、小松謙氏も嘉靖本の本文は必ずしも最古のものではないこと、嘉靖本の序には「嘉靖壬午」（元年、一五二二）とあるが、実際の刊行年は下る可能性もあることに言及している。
- *8 本論では葉逢春本と劉龍田本が一致する文字数、劉龍田本と嘉靖本が一致する文字数を計上する際以下のような基準で行った。

●左例（第一六九則）のように文面が異なっていて文字数も異なる場合、嘉靖本の文字数を計上することにした。左例の場合劉龍田本と嘉靖本では呉・蜀の位置が逆であるが、葉逢春本に比べると両者は近いということで（葉）／（劉）（嘉）…八字と計測した。

（葉）朕欲一統天下、於吳蜀何先。

（劉）朕欲一統天下、先取吳乎、先取蜀乎。

（嘉）朕欲一統天下、先取蜀乎、先取吳乎。

●一方にある文字が一方に無い場合も計上した。左例（第九八則）の場合、（葉）／（劉）（嘉）…一字（傍線部）、（葉）（劉）／（嘉）…二字（二重傍線部）。

（葉）吾今與主公往樊口、看周郎用計。

（劉）吾今與主公往樊口、看周郎破操。

（嘉）吾今與主公往樊口、試看周瑜用計。

●左例（第一則）のように、劉龍田本が傍線部を含め大幅な省略を行ったのか、劉龍田本と嘉靖本に共通する祖本の時点で既に省略されていたのか判断が難しい例もある。しかしこのようにある程度長さのある文である場合は計上することにした。左例（第一則）は（葉）／（劉）（嘉）…八字（傍線部と二重傍線部）、

（葉）（劉）／（嘉）…一字（波線部）。

（葉）玄徳甚喜。飛邀玄徳入酒店。正飲間…

（劉）この前から省略が続く。正坐飲酒…

（嘉）玄徳甚喜。——留飲酒間…

● 語句の位置が異なっている場合、その語句の文字数を計上した。左例（第一〇〇則）の傍線部は（葉）（劉）／（嘉）…二字と計上する。

（葉）孔明曰、「莫非將軍——見怪不曾迎接。」

（劉）孔明曰、「莫非將軍——見怪不曾迎接。」

（嘉）孔明曰、「——將軍莫非因吾等不曾遠接。」

● 本文中の割注及び批評、詩の詞書きと詩、韻文、評、贊の異同は計上しない。（嘉靖本において史書から評や贊が多く増補されていることや、静軒詩の有無の問題から計上しない方が正しい割合が出ると考えたため）。

*9 *6前掲の拙論。

*10 拙論「『三國志演義』の基づいた歴史書—終盤を中心に—」（『和漢語文研究』第十二号、京都府立大学国中文学会、二〇一四年十一月）。

*11 『演義』に朱熹の『資治通鑑綱目』が利用されていることは上田望氏によって指摘されている（上田望「講史小説と歴史書（一）—『三国演義』、『隋唐両朝史伝』を中心に—」第二章「東洋文化研究所紀要」、東洋文化研究所、一九九三）。筆者はさらに研究を進め、主要人物に関わるエピソードは『三國志』及び裴松之注、その他の人物に関わるエピソードは『資治通鑑綱目』が利用されていることを明らかにした（拙論「『三國志演義』の執筆プロセスに関わる考察」（『日本中國學會報』第六十四集、日本中國学会、二〇一二年十月）。

*12 拙論「『三國志演義』と『蜀漢本末』（『和漢語文研究』第十号、京都府立大学国中文学会、二〇一二年十一月）参照。

*13 宋・孟元老撰『東京夢華録』十卷。著者の孟元老という人物について詳しいことはわかっていない。書の内容は都（開封）の市街の風俗や当時の典礼、儀仗について綴ったもの。卷六「京瓦伎藝」の項（都の妓院で行われていた芸能を列挙した項）に「霍四究説三分」（霍四究は三分を語った）とあり、三国故事が語られていたことがわかる。

*14 中砂明德「中国近世の福建人」第五章「『通鑑』のインブリード—『綱鑑』（名古屋大学出版会、二〇一二年二月）参照。

本論文は平成二十六年科学研究所費助成事業・特別研究員奨励費・課題番号二六・一九八四「明代白話小説『三國志演義』成立過程と変容、及びその社会背景に関わる考察」の成果の一部である。

（いのくち ちゆき 文学研究科博士後期課程・学術振興会特別研究員）

（二〇一四年十月一日受理）